

---

# 駆け抜ける嵐に、静かな海を

水底に眠れ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

駆け抜ける嵐に、静かな海を

### 【Nコード】

N8370H

### 【作者名】

水底に眠れ

### 【あらすじ】

日伊と英仏が冷戦を行うさなか、起きてしまったピナツボ火山の破局的噴火。均衡は破れ、嵐がやってくる。戦争と言つ名の嵐が・

## Zero Lift (プロローグ)

古来、日本の人々は星の事を筒のようなものと認識していたらしい  
『今では筒が、星を狩るモノとなってしまってるがね』  
そういつていたあの男も、今この下にいるのだろうか？

《かぐや、聞こえるか？》

《アジスアベバ基地、良く聞こえる》

発射管制を行っているエチオピアの管制官が問いかけて来た

《下はとりあえず無事だ。そのかわり海がかなり騒がしくなってる  
が、君達のフライトにはもう手出し出来んだろう。さすがは聯合艦  
隊だな！》

帝國海軍第三艦隊。軽烈度紛争や、戦時第一陣の緊急展開を行う艦  
隊で、主に旧式艦と同盟国海軍の合同艦隊である。普段は主戦場を  
南シナ海と設定しているが、今回は大きく外れてインド洋まで進出  
していた。

《私達が失敗した時、周辺諸国に迷惑かけないように私達を撃墜す  
るための艦隊なんだから、あんまり活躍してもらっても嬉しくない  
わよ》

死刑執行人がどんな風であるかなんか聞きたくもない

《まあでも、あなたたちの無事が確保出来たんなら、多少は誉めて  
やらないとかもね》

インド洋はイギリス海軍の天下で、主力の半分近くが居る。少しど  
ころでなく苦労してるだろう

《おお、そういえば。例のロメオも艦隊にいるんだろ？キスの一つ  
くらい》

《かぐや、交信おわり！》

これだからイタリア人は・・・！

インド洋、セイロン島沖

『かぐや、周回軌道に入りました』

『大変結構。いや、しんどい戦をしたな』

第三艦隊に所属するアイギス駆逐艦よいまちづき、その艦体にはいくつかの凹みが発生していた。英海軍の重巡の針路妨害を防ぐべく、錨ぜり合いをしたためだ

『群司令から通信です』

『繋いでくれ』

傍らのコンソールから受話器を取る

《案外無茶をするタイプだったようだな、君は》

この群を一時的にあずかっている大佐は、感心したような口調でよいまちづきの行動に対する感想を述べた

『プリーズ（お願いします）では、ああいった手合いのあしらいはさせられませんよ』

第三艦隊は各国の連合艦隊であるため、命令するのにいちいちプリーズが要る。それが日本の指揮官達には不評を招いていた。

それに、いざ本格的な戦争となれば緊急展開軍であるがため、おそらく全滅に近い損害を受けるであろう事が予測されていた。事なかれで早く他の艦隊に移りたいという艦長も多数ではないが、少なくともない

《そうか、助かるよ。君は第三艦隊に長く居そうだな》

『ありがとうございます』

褒められているのかよくわからないが

《ま、私からの願いとしては、あまり有能でいてくれるな。本土に引き抜かれては元も子もないからな》

手を抜く所は抜けてことか。

『了解』

第二次迎撃の為、ソマリア沖に移動することに二、三言葉を交わした後受話器を置いた

『・・・あいつめ、最後の最後でやらかしてくれるなよ?』

彼が艦と艦との鏝ぜり合いに参加したのは他でも無かった。もしも、の時に撃ちたくなかったからだ

他国の艦にさせたく無いというのは口実にすぎない

『まったく』

CICで空を仰いでも、暗い天井しかみえない。しかしあいつは今、青い星を見ているのだろう。でもま、それでもいいか

『旗艦に続く、英艦隊の動向を常に注意せよ!』

いろいろあるだろうが、全般的に平穩に事態は進むだろう。誰もがそう思っていた。しかし、事態はそう進まなかったのである

**F i r s t   L i f t ( 第 一 話 ) ( 前 書 き )**

史実よりさらに破滅的噴火であります

## First Lift (第一話)

話は一年ほど前に遡る

フィリピン・スービック海軍基地郊外

フィリピンが大日本帝國、その衛星国家群である亜細亞連合に加入したのは1946年である。

1942年の日米開戦以降、極東英空軍及び米陸軍航空隊はフィリピンを根拠地に日本本土爆撃を続けたのだが、あまりの損耗率にモラルの低下をきたし、周辺住民への配慮を怠った結果、フィリピンは米国が敗戦したあと反動的に亜細亞連合に加入を果たした。スービック海軍基地はフィリピンでも最大規模の基地であり、第三艦隊の寄港地でもあった

『佐世保も、最初はこんな形だったのかな?』

そしてスービックに海軍の人間が集まるといふ事は、それを対象とした商売人が集まるといふ事であり、郊外には結構な市街地が形成されている

『お客さん、鼻屑にしてくれるのはありがたいけどね、良いお店いっぱいあるよ? 発散しなきゃだめよ?』店のおばさんが注文したマシゴージュースをもってきてそういった

『あいにく、下戸でして。食い物屋も一人で旅行しに来たのならともかく、今は艦隊の連中がいますから』

巻き込まれての酒飲みになるのは目に見えている。だから、このジュース(ちよっとした軽食もでる)屋で十分だ

『ちがうちがう! 女の子ヨ!』

『そういうのは、ちよつと・・・』

本土でも言われるのだが、若手海軍士官ともなると引く手あまたなのだ。金も貯まるので、そういった遊びをする人間も多い

『困った人ネ』

『いや、面目無い』

少し困ったような顔を見せて、おばさんは笑った

『おつばさーん！椰子の実ジュースひとつ！』

ガラガラガラつと勢いよく、おばさんと俺しかいなかった店に酔っ払いが一人突っ込んで来た・・・酒臭い

『あいよ、ちよつと待ってネ』

『・・・』

見れば、かなりスタイリッシュな身体をしている。出るここは出て絞る所は絞ってる。しかし、それにしては色が白い。つまりは

『あに見てんのよ』

『・・・いえ』

からまれそうなので、視線を外す。ちよつとおばさんが注文の品をもってきてくれた。ありがたい

『月海ちゃん、今日も結構飲んでるネ、景気良い話でもあった？』

『えっへへー、ひ・み・つ！昨日はいつもどおり、ちよつとくす

ねて来た古酒を飲んだだけどねー！』

ギンバエかよ。いや、彼女の場合それが出来るのは

『あ！おばさんにもプレゼントもってきたよー』

『・・・！』

ばっしっ！

思わず腕を掴んでしまった。ええい、関わってしまったものは仕方

が無い

『な、なにすん』

『それはルソン壺だろ！？そいつをどこで手に入れた？いや、俺の推測じゃあんたは6Fだろ？もしそれを偶然手に入れたとしても、そいつの所管は4F、或いはフィリピン国のものだ。個人が売買、或いは貸与することは禁じられている！』

反論を許さず、一気に言い切った。4Fとは第四艦隊、一般的には境界の四艦といわれる。着上陸を行う艦艇と陸戦隊、そして海上の警察任務、並びに灯台の管理を行う

そして6Fとは第六艦隊、沈黙の六艦といわれるように、サイレントサービス、潜水艦から編成される艦隊を言う

『し、知らないわよそんなこと！大体ね！そんなこと言ってたら艦上で魚釣つても4Fに伺いたてるっての！？』

『・・・海中作業中に拾得したんですね？』

月海といわれていた彼女が、あつと口を開けた。割と根は単純なのかもしれない

『ま、マアマア、二人とも仲良くするネ？ネ！』

おばさんが恐る恐るルソン壺を返して来た

『・・・まだ、貴女は犯罪を犯してはいない』

せつかくの休みを、こそ泥一人逮捕するのに使うには勿体なかった

『やな奴・・・！』

『チヨト！ホラ！これサービスするネ！』

おばさんがもってきたそれ、おいおい、カップルとかが使う枝別れしたストローの奴じゃないか

『・・・』

『サ！サ！』

いや、勧めんなよおばさん

『わかつたわよ』

『何してるんです』

彼女がストローをくわえていた

『借り作つたままなのが嫌なだけよ』

顔がほんのり赤い。酒だけの赤さだけではないだろう

『・・・まいったな』

なんでこんな事に。いや、段々と赤みが増していく彼女が流石に可哀相になつてきた

『では』

ストローに口を付けたと思つた刹那

チュー・・・じゅるるるっ！

彼女が一気に飲み干した

『けほっ！けほっ！』

そして案の定噎せた

『そんなに嫌ならしなくてもよかるっに・・・』

『うっさいわね！』

背中を撫でてやろうとした瞬間

ドーン！！！！

『じゅわっ！！！！』

『きゅっ！！！！』

『アイヤー！！！！？』

グラグラと爆発音みたいな音と共に、建物が大きく揺れた。椅子や机が倒れ、並べられたグラスが盛大に割れる

『ちよつ！どきなさいよ！つてむぐぐぐ』

押し倒した月海とか言う女の口を塞ぐ

『テロか？』

プロの犯行であれば、もう一度周りが動き出した瞬間にドカン！だ

『おばさん大丈夫か！？』

『ワタシのお店がー！』

大丈夫そうだ

『・・・』

周りが少し騒がしくなってからもしばらく待つが、次が来ない。

『ぶごつ！』

『ああ、すみません』

手を抑えた口から離す

『ちよつと！早くどきなさいよ！』

『わめかないでください』

身体も退ける、すぐに彼女も立ち上がった

『何なのよ、今は？』

あんな大きな爆発音、そして揺れ

『外が騒がしいですね』

注意しつつドアから外にでる。そこで見たのは

『か、核爆弾？』

とても巨大なキノコ雲。しかも、所々で雷すら発生している

『いや、いくらなんでも外れ過ぎる』

敵ならばそこまで甘くは無い。今頃消し炭か、死にぞこないになっている筈だ

『つ・・・！ポンペイか！』

思い付いたイタリア南部の都市名を、思わず叫んだ

『へ？何？ポンペー？』

なんのことかと、彼女は頭を傾げた

『原隊にもどるんです！一刻も早く！おばさんも！荷物まとめて基地に！急いで！』

『ア、アイヤ？』

おばさんも訳がわかってない。

『ちよつと！あなた何様のつもりよ！ちゃんと説明しなさい！』

ええい、理解力の無い！

『あれは火山で、雲の中には岩石がとんでもない量含まれている！』

『……』

まだわからないのか！？

『あれは耐えられる限界を越えたら崩れるんだぞ！』

それに、それが押し寄せなくとも

『うそ……っ！じゃあ』

ガタン！ガタン！パリン！

軽石が降り始めた

『急げ！どつちにしろこの街はおしまいだ！』

『待って！』

いちいちいちこの女は！

『なんです！』

『あなたの名前と階級をちゃんと教えて！おばさんをこのままほっとけないわ！』

階級と名前を知っていれば、基地内に入れる可能性は確かに増すな

『永野、永野修ながのおさむだ、少佐。白根で砲術長なげのたけながをしている』

本来は中堅の有能な中佐クラスがするべき職のだが、第三艦隊という立場と緊急展開軍という存在であることから、いざというとき即被害があるものと考え、若くてそれほど有能でもない人材にもそ

ういった経験をつませようと考えているらしい

『げ、結構上じゃない。まあいいわ。で、おばさんわかった!?!』

『わ、ワカタヨ』

おばさんが首をぶんぶん縦に振る

『よし、我々も戻ろう・・・』

彼女を見て、呼び掛ける言葉が無いのに困った

『第六艦隊翔鯨乗り組み、大村月海中尉おおむらつきなみ、戻ります』

『ああ、走るぞ!』

軽石が雨のようにふりしきるなか二人は駆け出した

二人の出会いはこちらから始まる。世界の均衡が崩れる原因も、ここから・・・

## 作中兵器紹介（前書き）

駆逐艦はひらがな標記の方がいいと俺は思う。

## 作中兵器紹介

作中出て来る兵器について

### 白根

超甲巡白根級一番艦、二番艦には鞍馬が居る。太平洋戦争では内南洋決戦で米海軍重巡部隊と、ハワイを巡る数次の海戦のうちの一つではアラスカ級と撃ちあい、これを撃破している

コペンハーゲン海軍軍縮条約の現有艦艇保全法案（一万トンを超える空母を除く砲艦の新規建艦禁止他）体制下のもと、何度かの改装を経て第三艦隊へ配属となっている

彼女達の仮想敵は国力から改装の遅れがちなオランダ海軍のK・ネデリンデン（旧ドイツ海軍ティルピッツ）とされる

### 武装

- 12in三連装砲×3
- 5in連装両用砲×6
- 25mmCIWS×4
- 8連装対空噴進弾×2（次発装填装填なし）

### 装甲厚

- 舷側190mm（傾斜20度）
- 水平120mm
- 砲塔前楯254mm
- 司令塔254mm

## 大型潜水母艦翔鯨

水中戦闘機海燕改8機を搭載する大型潜水艦、潮鯨級の五番艦である。水中戦闘機という名称は随分な物に思えるが、甲標的直系の兵器であり、簡単に言うなら攻撃型DSRVといったところか、月海はマニユピレーターで海底の古物や伊勢えび、清酒を拾っていた。いかに壊さず、あるいは殺さず持って帰るかが問題になるので、月海の腕はそれなりに高い証明ともいえる

## 武装

610ミリ魚雷発射管6基（26発）

## アイギス駆逐艦よいまちづき

帝國海軍に60数隻在籍するアイギス機構（英名イージスシステム）搭載駆逐艦、冬月級対空駆逐艦のうちの一艦である。殆どが第一、第二艦隊への集中配備であるため、第三艦隊には9隻しか配備されていないが、周辺国の艦艇が使える為（アイギス艦は東シベリア共和国か満州国ぐらいしかないが）、良しとされている。あくまでやられても良い艦隊という側面は拭えないが、即応とはそんなものである。

一万トン無い艦体で、英海軍のマルス級重巡（英版デ・モイン）と罅ぜり合いしたせいではっこぼこである

## 武装

127ミリ単装砲一基

VLS×90（対空70対潜20、61セル前29セル後）

四連装対艦ミサイル発射基2基（艦尾）

25ミリCIWS二基

610ミリ四連装魚雷発射基二基

チャフ・フレア装置一式

ブレダ多目的ロケット発射機二基

## Second Lift (第二話)

白根CIC

『砲術長、戻りました』

身体についた灰をはたいて、残っていないか確認してから永野はCICへ入った

『永野少佐！よく戻られて！』

『・・・副長は？』

半舷での上陸という事で、艦長も陸にあがっており、いま艦の指揮は副長が行っているはずだ

『港湾管理局に一時的に艦を離れられました』

何か書類の提出に出してしまったのだろう

『まだ戻って来てないのか？艦長と航海長は』

二人は釣り仲間で一緒のはずだ

『まだです。永野少佐、艦の指揮をお願いします！』

『いやいや、主計長や通信長はどうした』

かなり自分より年長の人にやってもらうのが筋だろう

『主計長は食材の仕入れに、通信長は負傷しました』

『なに！？』

『どういふ事だ！』

『この事態になって、外の様子を見ようと外に出ましたところ、目につぶてが偶然・・・飛行長はクラーク基地にいったきりで、機関長は上の事はわからないから、と』

なんてこった・・・今、この艦には指揮を行える人間が存在しないのだ。この緊急事態に

『わかったよ・・・指揮を受け継ごう。それじゃ、佐世保の艦隊司

令部に緊急連絡！フィリピンで普賢岳以上の火山噴火！至急指示を  
求める。本艦は離岸準備！」

『はっ！』

その号令で、機能不全に陥っていた白根のシステムはようやく回復  
していった

『港湾管理局からです！』

そんな中通信が入った。副長からだ！

《副長！》

ガラでもない立場から解放されると思ったのだが

《ああ、永野少佐か。事情は大体聞いた、白根を任せる》

《すぐには戻られないんですか？》

向こう側が今度は嘆息した

《避難民が建物に押し寄せている。旧米軍施設で強固だからな。お

かげさまで動けん》

《今、離岸準備の作業をさせています》

それを聞いて向こうの雰囲気が厳しくなった

《避難民を載せんのか？》

逃げるのか？にしか聞こえませんよ、それじゃ

《主計長も戻られておらず、食料も怪しいですし、軽石の降ってい

る現状では、甲板に座らせる訳にも。格納庫は開いてますが》

《ああ、くそっ！AEW機器か》

そう。戦艦搭載のへりは、弾着観測も兼ねてAEWへりを搭載して  
いて、機密情報だらけだ。気軽に載せて良い場所じゃ無い

《副長、そちらは港湾管理局ですから、近場のフェリーや客船が把  
握できませんか？それなら》

《なるほど。わかった！可能な限り呼びかけてみよう。データも送  
る！》

フィリピンは多島海であるため、フェリー関連の船舶は少なくない。  
人員輸送はそちらに任せるべきだ

『・・・』

「いたい俺は、他に何をすべきなんだろうか」

その5時間後、南シナ海・翔鯨

「えらいことになっちゃったなあ」

月海は翔鯨の甲板から、スービツクの方を眺めて呟いた。スービツクに居た日本艦は、白根を戦闘に単縦陣で進んでいた。ここでも軽石は降ってこないが、灰が雪のようにチラチラと降っていた

「おばさん大丈夫かなあ？」

脱出する私達をよそに、フィリピンの船舶はスービツクに突っ込んでいっている

「月海！」

同僚がそんな月海に声をかけてきた

「どうしたの？血相変えて」

「クラーク基地の連中が、ぜ、全滅だつて」

スービツクよりクラーク航空基地は、かなり火山に近い。火山弾の雨と灰で閉じ込められ、やがて建物の屋根が灰の重さに耐えられなくなり・・・

「馬鹿な事か、いやらしいことしか言わない連中だつたけど、そう・・・」

死ぬなら空で死にたかつたでしょうに

「それで、私達は？」

こんな時だもの、避難民を載せに行つたつていいんじゃない？

「わからないわ」

同僚は首を横に振る。目の前に凶体のでかい奴がいるじゃない！

『あいつ！役に立たないわね！』

あのなんてったつけ？イヤミったらしい奴！

ポタツ、ポタツ

『雨？なにこれ！？』

見上げる。顔にかかった雨が黒い

『早く中に！』

『もっつ！』

逃げるしか出来ないの！？

白根CIC

『以上です』

ようやく入って来た司令部からの通知に、永野は呆然となった

『パワラン水道まで退避、以後の救護活動はフィリピン政府に一任せよ？人員の欠員は本土で充足？』

艦長達を、見捨てるというのか！

『シンガポールの英軍の事もあります』

英東洋艦隊が動き出していて、その牽制を、高雄から進出してくる第三艦隊の本隊と共に行え、という命令もあった。自然災害の混乱のうちに手が回らないというのは、我が軍の統制が疑われる。というのだ

『かつての関東大震災で、長門は英海軍の巡洋艦に機密がバレても

東京に急行した』

これを美談ととるか、醜聞ととるか。司令部、あるいはその上の政府は醜聞と捉えたらしい

『理屈はわかる、だが、納得は出来ん!』

くそっ・・・!

『少佐!外部モニターから!』

部下が血相を変えて報告した

『映せ!』

赤外線画像で見る噴煙が崩れていた。そして、ピナツボの方から赤い塊がスービツクの方へと向かい、なだれ込んでいく

《副長!》

思わず港湾管理局にいる副長に通信を入れる

《副長!》

《わめくな馬鹿者、見えておるわ》

返事が帰って来た。

《今、UAVを送ります!それに捕まれば海ぐらいまでは!》

《無理だ。外に出れんし、ここに突っ込んでも奪い合いになるだけだ。今、ここにいる軍人、職員、わかるだけの民間人の名簿を送った。掘り返す時の参考にしてくれ》

あくまで落ち着いた声で副長は答えた

《副長・・・おさらばです!》

もう、駄目なのですな

《ああ、最後の配慮に感謝する。俺が喚きだす前に通信機を破壊する、後は任せた。通信終わる》

『・・・切れました』

永野は大きく肩を落とした。ピナツボからスービツクは60キロ程離れていたが、火砕流は新幹線並の速度で流れ落ち、10分経たずに街を、基地を飲み込んだ

沈黙がどれほど続いただろうか

『少佐、海上に炎上中の船が何隻かあります。微速航行中!』

火砕流は海をしばらく渡って収束した。逃げ遅れた船に違いない

『・・・喫水線下なら、可能性があるか?』

しかし、命じられたのはパラワン水道への進出である

『船上火災では、緊急救難の必要性としては薄いな』

沈む気配がないなら、軍艦が手を出す謂れは無い。そう、沈む気配がないならば

『翔鯨へ連絡をとれ』

確か海燕改には海中格闘戦用に、杭打ち機の大型版を搭載していたはず。

『よろしいのですか?』

『その質問を受けると厳しいな』

お互い苦笑しあう

『ま、航海日誌をつけるべき艦長も、メモ魔の主計長も居ない今となっては、皆の良心に従うしか無いが・・・』

少なくとも強制は出来ない

『我々は何もしませんでしたよ』頷きあうCICの要員達、すまない  
『感謝する』

結局この未曾有の大災害に於いて、スービック基地に居た帝國海軍艦艇が救助出来た人間の数は、たったの514名に過ぎなかった

Third Lift (第三話)

ピナツボ火山噴火より一月後

佐世保

かつて皇族が船でここを訪れた時、嵐にあつて帆が裂けていた事から、裂け帆、転じて佐世保となつた此処に、永野は居た

『駆逐艦よいまちづき艦長を任ず、か。やれやれ』

海軍はそれなりに温情を与えてくれたらしい。

「先のピナツボ火山噴火で、世界的な冷害の発生が予想されています」

テレビはフィリピンでの災害救出よりも、そのあとの事に目を向けはじめている

「赤道上に多く噴出された噴煙は、メコンデルタや、インドの食糧生産に大打撃を与えるのは間違いないですね」

コメンテーターの言葉に耳を立てながら、長崎名物の角煮まんを頬張る。間違いなくもつと高くなるからも少し食つところかな

『おやじさん、追加でn』おっさん!』

・・・どこかで聞いたような声が  
『げっ!? あんたは!』

背を向けようとしたが、間に合わなかつたらしい

『あんたは! 聞いたわよ、あの時白根を動かしてたのはあんただつて』

『ええ、私が指揮を受け継ぎました。大村中尉』

あんまり相手にしたくないんだけども

『・・・なんでもっと助けられなかったんですか、永野・・・中佐。まだ救えた筈です』

階級を言ったことで、彼女も居住まいと口調を変えた

『我々は必ずしもフィリピン国民の安全の為に存在している訳ではありません』

彼女の目が吊り上がる、まあ、そうだろうな

『でも中佐は、船舶の生存者を助けましたよね』

『・・・知らないね』

少し、ほんの少しだが、彼女の顔から険しさが無くなった

『自分の手柄では無い、と』

『緊急避難に出くわしただけです』

ああ、そうか。この階級章が気に食わなかったわけだ

『・・・正直、今度の昇進は早過ぎると思っっています。その任もね』  
失敗するのを期待しているように勘繰ってしまっぐらいだ

『・・・やな奴、というのは撤回します。すいませんでした』

『かまわないよ、事実だ。』

永野は肩をすくめた

『さらに事実を言えば、救助の為に命を賭けるのに腰が引けたただけだしね。私は臆病者だ』

彼女はポカンとしている。しまった、しゃべり過ぎたか

『話は終わりかな？』

『なにか、あつたんですか？』

『・・・ええい、こんな時だけ鋭い』

『中尉、言いたくない事の二つや三つくらいあるだろう』  
席を立つ

『待ってください。あの場に居た人間として、知っていただきたい  
事があります』

『なんだ』

彼女は一度、思い出すように目をつぶった

『あの時、船で【作業】を行った私達は見たんです、火砕流に巻き

込まれて死んだ人々を』

傾斜した船から落ちて、沈んでいく沢山の黒こげ死体

『もつと救えました』

『ああ』

頷く

『強くなってください。中佐は士官なのですから、ましてや艦長となられるならば』

『勝手な事を言う』

彼女の顔を見つめる

『では、強くなるために、俺の女になつてくれるか？』

『なっ！？』

中尉は絶句した。そりゃ予想外だったろう

『まあ冗『いいでしょう、私で良いのでしたら』

・・・はい？えーっと、なんだ・・・まいった、これは頭に無かつ

たぞ（汗）

『は、ははは』

どうしよう

## ハワイ・パールハーバー

太平洋戦争に於ける講和条約であるサンフランシスコ講和条約、その時の条文により工廠施設を始めとして軍事施設を全撤去したハワイは、よく外交交渉の場として利用されて来た

『まったく、ろくな話じゃないな』

『ろくでもない事態が起きてしまったのですから、仕方ありませんまい』

日英両国の情報員は街の明かりを橋から眺めながら語り合う

『北半球での冷害による穀物生産の低下、これだけなら特に問題は無いのですがね』

満州国や北アイルランドが勢力圏内にある両国だ、寒冷地タイプの穀物生産に問題は無い

『貴国はタイとフィリピンの面倒を診るだけで良い』

オランダはインドネシアの一億人、フランスはインドシナの八千万人を維持しなくてはならない。イギリスもインド東部の人間を維持する必要があった

『だからといって、負ける事を前提とした出来レースの戦争の話を持ってくるのはどうなのかな？』

日本側情報員が言った言葉に、英国側はフフンと笑った

『我々が指導力を発揮して、ただで撤退されても困るでしょう？』

『それは確かに、だから此処に私がいるわけです』

概算で三億人の人間の食いぶちを用意するなんてまっぴらだ。せめていくらか減らしておきたい・・・少なくとも食糧配給を怠るだけの理由を持った事態を引き起こしておきたい、それが両大国の意思だった

『グダグダと戦争をしましょう。お互いの為に』

『調律された闘争という訳だな。ま、仕方ないな』

これから死ぬ人間には申し訳の無いことだが、覇権国家とはそういうものだ

『そうはいいますが、既に戦時に向けて若い士官を艦長職に就ける前例を作ったと聞きますが？』

『いやいや、彼は英雄です。彼を讃えずして誰を讃えよというのか』

二人の情報員は、互いに限定的な情報を意図的に漏らしながら人込みの中に消えていった

そして物語は最初の場面へ、インド洋へとつつろい行く

### 第三艦隊の編成と、作中兵器紹介その2（前書き）

出してからよりも出す前に紹介したほうがいいのかな？と、投下

## 第三艦隊の編成と、作中兵器紹介その2

第三艦隊の編成と作中兵器解説、その2

### 第4戦隊

長門・陸奥・白根・鞍馬

### 第7航空戦隊

信濃・薩摩

### 第11戦隊

蓬萊・天龍・龍田・五十鈴

### 第31駆逐隊

みつづき・おぼろづき・よいまちづき

### 第32駆逐隊

みなづき・ながつき・もちづき

### 第33駆逐隊

ゆづづき・みかづき・きくづき

### 第34駆逐隊

たちかぜ・なだかぜ・しおかぜ

## 長門級戦艦

長門級の2艦は、太平洋戦争では内南洋決戦、ハワイ攻略戦、そのどちらとも敵主力部隊と撃ち合い、傷付きながらも帰って来た古強者である。数次の改装を経て未だ現役にあり、他の戦艦も同じだが、中身は別物になっている。仮想敵は仏印展開のリシュリー級である

## 武装

41センチ連装砲×4

5.1インチ連装高角砲×10

25ミリCIWS×7

## 装甲

舷側305ミリ（傾斜20度）

司令塔370ミリ

水平180ミリ

主砲塔500ミリ

29ノット

## 信濃級

大和級三番艦と四番艦からの改装空母である。何度かの改装を受けて、アングルドデッキの近代空母として現役である。元が大きいせいで、史実ミッドウエーより長生きしているが、原子力空母の瑞鶴と翔鶴が就役次第練習空母として前線を去る予定である。

搭載機84機（72機・砕風、6機・崔雲、6機・多目的へり）

## たちかぜ級

あきづき級アイギス駆逐艦によつて、帝國海軍は汎用と対空に別れていた駆逐艦の統合運用を行うようになったのだが、たちかぜ級は対空駆逐艦という事もあり、6隻程が未だに現役にあると共に、アイギス駆逐艦を運用出来ない諸外国に輸出され、運用されている。ちなみに帝國海軍はあきづき級アイギス艦がやはり高コスト過ぎるので、はつゆき級汎用駆逐艦の代艦としてむらさめ級を建造しつつある。

性能はそれぞれ、たちかぜ級がはたかぜ級に準拠し、他は實際の護衛艦と同じものである。

第三艦隊の艦艇として先に挙げた各艦の他にも、諸外国の艦艇、フィリピン海軍のはつゆき級3隻と、タイ海軍のトンブリ（旧重巡鳥海）にはつゆき級3隻、台湾海軍はたちかぜ級2隻にはつゆき級4隻を随伴している。

艦隊の総数はBB4・CV2・CG4・GCA1・DDG14・DD10の35隻を数え、英仏の東洋艦隊に睨みを効かせていたわけである。

F o r t h   L i f t   ( 第 四 話 )   ( 前 書 き )

袋のネズミ、とはこの事である

## F o r t h   L i f t   ( 第 四 話 )

ソマリア沖・よいまちづき艦長室

月に着陸艇を降ろし、再び回収に成功したかぐやは、今日アジスアベバ基地に戻ってくる予定となっていた

『しかし驚いたものだ』

彼女、月海がDSRVでのマニピルター技術を買われてSSTOのマニピルター担当として配属されるとは

『まさかの人選、というのは聞いたがな』

本来は特殊な訓練を受けた第五艦隊、基地航空隊（通称・荒鷲の五艦）の連中がなるはずだった

『・・・何か意図があるはずだ』

帝國海軍という所は、そう優しい所ではない。全てには意味がある。ここ数ヶ月考えていた。俺は良い、どこかでしくじって左遷、退官にするぐらいだろう。何故彼女をそんな責に就けた

『事故による改修の必要性か？』

ありえない、むしろ削られるだろう。宇宙開発は我が国にとって重要なものではない。海軍が口を出しているのは、海に降りる物は海軍の管轄であるところ押ししかつての源田中将の流れがあるからだけにすぎない。

実際アマテラス計画で打ち上げられた多数の衛星群は、観測及び偵察衛星である事よりも長距離対艦ミサイルの誘導サポートとして上げられたオルレアン計画の衛星群、そして成層圏を抜けてくる大陸間弾道弾をデブリで満たして破壊するのを主目的としている

『なぜ、今この時期にこれをしなければならなかった』

月に降り立ったというのは確かにたいした事だ、だが、なんになる。

開発して資源化なんて数百年先になるに決まっている

『それなのに、何故……』

イギリス、ロンドン某所

『頃合いですな』

『頃合いか』

円卓に座る老人達はそういつて頷きあつた

『火山噴火で機能不全を起こした衛星を、今回のSSTOの仕業とする事で、宣戦布告をする』

『しかし良いのか？彼等は』

口ごもる円卓の一人に、他の一人が説明する

『日本は岩戸に女神を隠れさせぬという事を確約している。こちらも砲火をもって今インド洋にある艦隊を攻撃しないと。核もお互い使うつもりは無い』

『彼等も解っている。世界なぞをしょつても何の意味も無い事を』  
何人かがゆつたりと笑う

『それで、最初の一撃は誰が行いますのかな？』

『かのSSTOに、エジプトのRAFとジブチのフランス空軍の両一個飛行隊が行う』

円卓の老人達は天井を見上げる。葉巻の煙の染み込んだ、薄暗い壁が広がるだけだった。

『さて諸君、終戦についてだが……』

ソマリア沖・よいまちづき

そろそろかぐやが降りて来るといっているので艦橋に戻った永野だったが、そこで凶報を受け取った

『宣戦布告、だと!?!』

キイイイイ!!!

信濃から碎風が最大出力で上昇していく、その轟音で永野は我にかえった

『マレーシアラインの地図を!』

我々はインド洋に居る、つまりはいずれ戻らなければならない。一番問題となるのは、永野の言ったマレーシアライン（マラッカ海峡・ガスパル海峡・マカッサル海峡・モルツカ海峡）を通らなければならぬことである。あまりに狭く、大規模な防空陣形も構築できないどころか、回避運動すらむずかしい。どこから突破したらよいのか

『艦長、かぐやがサハラ上空で迎撃されたそうです』

少し場の空気に間が空いた

『だからなんだ、俺達に何が出来る。要らん情報を寄越すな!』

『はっ!』

年かさの航海長がため息をつく

『艦長、海図が歪みます』

『・・・すまん』

力を入れすぎた拳を離す・・・航空隊が上手く援護してくれるだろう。考えるな

『どうみる、航海長。マラッカは論外として』

スマトラ島が大きく張り出しており、海峡進入に時間がかかりすぎる

『スタンダードな場所としてはモルツカでしょうな。次善はスندا、か』  
海域としては一番広いモルツカと、敵中もいいところの、意表を突く形のスندا、か

『うん、そうだろう。だが、寺津中将はおそらくただでは通ろうとはしないな』

長門に座乗する寺津中将は知将として知られている。加えていうなら、恐ろしく攻撃的な用兵を行う方だ

『そういう事は隊司令が考える事ではありませんか？』

一艦長が考える事じゃないだろう

『こればかりは祖父の血だ、許せ』

『・・・そうでしたね』

永野修身、その孫があなたでしたね

『それに、いつ隊の指揮が回ってくるかわからないしね。実戦となればなおさらだ』

実感を込めて言う。この件に関しては航海長も黙るしか無い

『とにかく、最善を尽くそう』

『了解です』

・・・そう、最善を尽くすしかないのだ。戦争は始まってしまったのだから

SSTOかぐや・エチオピア上空

純白の機体に、かぐや姫の髪の毛を意味する黒い帯でイラストされていた流麗な姿だったかぐやに、かつての面影は無くなっていた  
『助けてえーりん。といったところだな、みんな、無事か！？』

『うつす』

『勘弁してください』

『な、なんとか』

クルー三人が返事をする。サハラ砂漠上空で至近距離に3発ミサイルを食らった。腹が耐熱仕様じゃなかったら、とつくに墜ちてるどころだ

『アジスアベバ基地、サハラの奴らを振り切るのに燃料を使っちゃまった。そっちに降りるのは無理だ』

『了解、艦隊に連絡する。それから悪いニュースだ、ジブチの航空隊がそっちに向かってる。艦隊が4セット碎風を差し向けてくれたが、会敵は君達が先だ』

『くそつたれめ』

通信を終えて悪態をつく、ラファールDが20機とか鬼畜過ぎんだぞ。もうこの機体には推進剤がない。滑空しかできねえんだぞ

『機長？』

『みんな、ズウ、エズダ社のイジェクトシートを採用すべきな事態になった・・・覚悟を決めてほしい』

クルー達は息を飲む、襲撃された時点で頭をよぎりはしたが、認めたくないそれを告げられたのだ

『うまく切り抜ければ艦隊が回収してくれるだろう。だが』

恐らく不可能だと、状況を説明する

『今回の接敵は正面からで、時間を稼げばいいんですよ？』

月海は、これしかない、と顔をあげて言った

『考えがあります、一度しか使えませんが・・・機首を上げながらパラを使うんです』

失速は覚悟の上、でも、一気に高度を落とす事が出来る・・・ただの墜落にしかならないかもだけど

『あちらも私達と会敵するためにかなりの速力を出してるでしょうから、一度すり抜ければ・・・！』

かなりの距離を稼げるんじゃないかしら

『よし！それでいこう！』機長は拳でふとももを打って、正面に向き直る。速度が速度だ、そろそろ・・・

《かぐや！接敵するぞ、何とか避ける！》

アジスアベバ基地が伝えてくる。SSTOにミサイルの逆探なんて無駄な物は乗せていない。回避のタイミングは機長次第だ

『いくぞ！パラ展開！』

機首を上げたかぐやは、パラシュートを展開して急減速を行う・・・墜落し始めたというのが正しいかもしれないが

《なにいつ！？》

《ミサイルターゲットロスト！突破された！追撃！追撃！》

ミサイルの投網で一気に絡めとるつもりであったジブチ航空隊のラファールは旋回して追いかける

『お、おむら中尉！一撃、はよけた、が、追い付かれる、ぞ！』

ものすごい振動の中、機長は機首を下げようと踏ん張る

『後の、事なんてっ考えてませ、んっ！』

ちよっとは時間は稼いだでしょ！後の事は知らないわよ！

《かぐや！待たせたな！》

《武田騎馬隊だぜー！》

そんな通信とともに、追い付かれる寸前だったかぐやの頭上を、3本の白煙が勢いよく通り過ぎていった

『信濃航空隊！』

続いて第二波のミサイルが通過する

《貴機は海上に不時着されたし、姫を守る！》

そして36機の碎風が通り過ぎる。川西のマッシヴな機体が、こんなに頼もしく見えるなんて

《頼んだ、風を砕け！》

《言われるまでもない！》

そしてかぐやは空戦域を突破する、もう下は海だ

『着水する！後は神様次第だ！』

青い壁が迫る。想像絶する衝撃がクルーを襲い、月海は気を失った。

その最後に脳裏に浮かんだ面影を全否定しつつ

Fifth Lift (第五話)

・・・潮の香がする。ああ、私死んじやったのかなあ。

『・・・』

違う、なにか別の臭いがする。嫌いではないけど、好ましくないこの臭い。それに、波を切る音

『うー・・・最悪』

私は生きてた、此処はどこかの船だろう。疲れがどつと襲ってくる『日本艦だといいいけれど』

意思の疎通が出来るか心許ない、ええええ、潜水学校出で学がないですよーだ。

・・・カタカタツ、カチャツ

やばっ！なんか物音が。まだ寝たフリしとこ！

『・・・』

足音がベッドの近くまで来る。なんか武器、武器って、私ノーブラ！？シャツと下着だけ！？

『全く、何の因果だか・・・』

聞き覚えのある声、こ、こいつは！

『早く良くなれよ』

頭を優しく撫でられる、つーか、何こつ恥ずかしい事を！

『ん、顔が赤く。熱だといかん、軍医n』こ、子供扱いすんなっ  
！！』

頭を撫でていた手を、右手で掴んで離し、上半身を起こす

『・・・』

ちなみにシャツは、艦に居る女性兵用だったためか、丈が小さく、  
また、彼女よりは小振りだった

『起きているなら言え、大村中尉。それからまだ横になっている、  
風邪をひく・・・というより目のやり場に困る』

そういわれて、月海は自分の恰好を思い出した

『っ！！！！い、いますぐ、出ていけっ！！！！』

『ま、待て！出ていくから手を離せ！』

メメタア！

よいまちづき・CIC

『今戻った』

CICに戻った永野を出迎えたのは砲雷長だった

『あ、戻られましたね？艦長室ではお楽しみn・・・』

『これがお楽しみなら、今の状況だって楽しめるぞ』

目の回りと頬が膨らんでいる、ありゃ後で腫れるのは確定だな

『だ、大丈夫ですか？』

CIC管制を行っている女性兵の一人がハンカチを持ってくる。

『大丈夫だ、持ち場を離れるのはどうかと思うが、ありがとう・・・』

『鷹島です、中佐。すいませんでした！』

階級は、一等兵曹か

『うん。鷹島一兵曹。洗って返すよ』

戻っていく。管制要員には女性兵がそれなりに（といっても全体の5%もいかないが）かつ、出世は望めないが、付くように海軍もなった。報告等でも女性の声の方が落ち着くのだそうだ

『どうかな？寺津中将の本隊は』

『未だ機動中です、掻き回してくれています』

寺津中将はマラッカ海峡を除くマレーシアラインの各海峡から等距離の位置でフェイントを繰り返している。

そして我々はというと、タイ海軍の各艦と第31駆逐隊は共にSSTOの乗員を救出後、マラッカ海峡を突破して臨機応変に離脱せよとの命令を寺津中将から受けた

長門から離脱時にわざわざ、キカンタイノブウンライノルという発光信号を送るあたり時代的だが、中将らしい

『となると、今夜かな』

マラッカ海峡への突入は。

『第三艦隊がスンダ海峡からチモール島沖に転舵して向かう時分ですね』

頷く

『俺達を叩き潰すか、見逃すか』

敵の抱える問題は、我々がどの海峡から抜けるかわからないため、分散配置にならざるをえない事

『見逃した場合、スンダ海峡に展開しているモニター艦部隊を攻撃！というのが臨機応変にあたるんだろうな』

モニター艦・・・コペンハーゲン海軍軍縮条約、別名として現有艦艇保全法案と呼ばれる一万トン以上の砲艦の建造禁止という体制に

対する英海軍の答えである

『攻撃すべきはロード・クライヴ級、ですね』

先代の船体より五割増し、9000トンクラスの船体に42口径18in単装砲塔を搭載した鋼鉄のキマイラ。本来モニター艦が外洋艦艇に勝てない事は、帝政トルコ海軍が証明してくれているのだが、回避の難しい、或いは不可能な海峡部では圧倒的な存在になりうる。彼女達は搭載した984型直系のレーダーに託つけてこう称される。マレー沖のサイクロプスと

『そいつらの射程はRAPで五万メートル。トンブリが同じく8in砲で五万メートル。良い勝負だが、元の弾が大きいあちらの方が威力は高いだろう』

まあそれでも、大和が通常弾頭で七万、RAP（核砲弾はこれにあたる）で九万から十万の射程でぶち込んで来るのよりはかなりマシなんだが

『ミサイルではどうにか出来ませんか？タイ海軍の随伴艦を含めて48発ありますが』

永野は首を横に振った

『随伴にアイギス艦の一隻でも混じっていたら、完全迎撃されかねない数ではない』

飽和攻撃って奴は一気に80発ぐらいは叩き込まないと意味が無いものである

『・・・何隻か接敵前に食われるのも覚悟しなきゃな』

逆を言うならそれがトンブリでなければ良い訳だ

『賭けですね』

砲雷長はため息をついた

『トンブリは条約前の改装で一万八千トン近くなった最上級や伊吹級じゃない。まだ一万二千トンで、このつきクラスのアイギス艦とは判別がつきにくい』

そういう目算は見てとれた。当たるも八卦、当たらぬも八卦・・・

『なんとか生きて帰りたいものだがな』

永野は誰にも聞こえないように呟く。死なすわけにはいかんのだ。特に、死地から帰って来た彼女達だけは

ジャワ海、仏蘭合同艦隊旗艦・ジャンバール

『ライミーめ、怖じけづきよってからに！』

戦艦三隻を主力とする仏蘭合同艦隊、その指揮を執るリュフェック大將は毒づいた。敵は戦艦四隻を主力とした艦隊、戦うならば戦力の全投入は当然である。海峡全てを抑えていては、戦力がまるで足りない。そこで彼は、インド洋に展開している英艦隊に後背から攻撃するように要請したのだが、にべもなく断られた

『核砲戦！上等じゃないか！』

あまり追い込み過ぎると、敵は核を使うかもしれない。エレガントに戦え。だとか抜かしやがった、馬鹿にしゃがって！

『長官、偵察衛星がマラツカ海峡を突破するらしき艦影を捉えました』

参謀が報告しにきた通信長から紙を受け取る

『シャム海軍ですな、随伴にアイギス艦が三隻・・・例のSSTOの乗員を回収していた部隊です』

リュフェックは英艦隊の事を頭から追い出して目算した。駄目だ駄目だ

『艦隊を分けるのは愚の骨頂だ。思いつぽではないか』

我々が負けてしまつては意味が無い

『ですが、この艦隊がマラツカ海峡を抜けた後に南下しますと』

英海軍のモニター艦部隊が居ます、と参謀は指摘した。この部隊は海峡の抑えに大きな役割を果たしている

『・・・どうだろうな、彼等はこの部隊を投入するだろうか』

『と、言われますと？』

リュフェックは参謀に疑問をていした

『彼等の半分はシヤム海軍だ、死地から逃したいと考えたのではないだろうかという点が一点、そしてもう一つはSSTOの乗員だよ、彼等を危険にさらすという点だ』

シヤム海軍はともかく、開戦の理由たるSSTOの言い分を世界に聞かせなくていいのか？

『かけるべきリスクではないと考える。それにこの規模だとモニター艦部隊にも勝てるか怪しいぞ？』

随伴の護衛にも、駆逐艦が四隻いる。簡単にはいかん

『過剰な反応は敵の思いつぼだ』

『・・・わかりました』

参謀は引き下がった。リュフェックの言もそうだが、たとえモニター艦部隊が敗れたとしても、我々が敵の主力さえ逃さなければ何とかなると思っただからだ

『そんな手に乗るかよ、日本人』

リュフェックはひとりごちた

『我々だけでおまえ達の相手は十分だということを思い知らせてやる』

そしてフランス海軍の実力を世界に喧伝してやるのだ

ジャワ海の闇は熱く熱を孕み、今まさに激突せんとする両艦隊を包み込んでいた。

S i x t h L i f t (第六話) (前書き)

避けられない 18 i n は実に恐怖です。文中にミスがあったので差し替えました

## S i x t h L i f t ( 第六話 )

2001年11月8日、カリマタ海峡・よいまちづき

夜の闇をまとい、7隻の艦隊は進む。隊列はタイ海軍のはつゆき級駆逐艦3隻の後に続いておぼろづき・みつづき・よいまちづき、そしてトンブリの順である。艦隊の指揮は階級の高い、タイ海軍のバヤン少将が執っている。指揮官陣頭としてトンブリが一番艦でないのは、彼が怖じけづいたからではない。この海峡部で攻撃にさらされ、もしもがあった場合に先頭が後ろを塞がないようにするためだ  
『・・・』

永野は前方のみつづきのウエーキを眺めていた。夜光虫の一種で、ウエーキが白く光っている。これを夜間航行中は追うのだ

『そろそろ、か』

敵の18in砲の射程圏内にはいる

『対空警戒を厳となせ、アイギスでは敵のレーダーに劣るという事を忘れるな』

永野は注意を促す。アイギスが敵のレーダーに劣るといふのは事実だ、この海域に於いては

太平洋や南シナ海で戦うための対空レーダーを組み込んだアイギスシステムは、ここのような多島海では虚探知（見えすぎて）の削除に能力を割かれてしまうのはどうしようもない。勿論敵のレーダーが太平洋等の広い海域に出て来たら逆の事が起きる。低空を飛ぶ対艦ミサイルの探知に失敗する恐れがあるのだが

『さて、どう出る』

敵には我々を射撃するにもいくらかの選択肢がある。

一つは先頭艦を狙つての集中射撃、後続を立ち往生させる意でのオソドックスな手  
二つは明らかに大きい我々、つきクラスの先頭から順に集中射撃という堅実な手  
三つは弾の威力を頼み、旗艦とおぼしい艦を最初から攻撃するために、単艦ごとの攻撃を行う

この三つだ、敵は

『本艦隊に急接近する物体4！目標は・・・おぼろづきです！』

CICからの報告が入る。自分達が狙われてない事にホツとしながらも、永野は思った。敵は堅実なタイプか！と

『航海長、前方のみつづきに注意。転舵に備えよ』

『ようそろ』

航海長は微動だにせず答えた。肝が据わってるなあ

おぼろづきCIC

『弾着まで10秒！』

隊司令はディスプレイに表示された画像。自艦の針路と、点滅しながら小さくなる砲弾の着弾予想範囲円を確認する

『狭叉、か』

近くは無い、だが、捉えられている。こうなってしまうえば、後は相手を先に沈める以外に手は無い。しかし我々にその手段は無い。艦が少し揺れた。敵の弾が海面へ弾着したのだろう

『次弾、来ます!』

『・・・遠いな』

せめて、魚雷が使える距離まで接近できれば、一矢むくいたのだが・・・いや、未練だな。

『隊司令!ミサイルを撃たせてください!』

『一斉発射でなくば、攻撃の意味を無さん。僚艦に無用な圧迫を与えるな』

海軍軍人なら黙って死ね

ザババババババ!!!

『むっ』

『うわっ』

次弾の弾着はさらに近くに着弾のためか、水柱を被る音と、先ほどより激しい揺れに襲われた

『次弾・・・っ!』

報告の音が途中で途切れた。弾着予測円が小さくなりながらもおぼろづきを完全に捉えている。艦長は動きの小さい回避運動を行っているが、これは当たるな

『現代の砲撃戦は緩やかな死を運ぶ、か』

『総員!対衝撃姿勢を為せ!』

艦長が艦内放送で叫ぶ。しかしそれも虚しく響くだけだった

・・・その瞬間、マツハ2を越える弾体はおぼろづきのマストを吹

き飛ばし、後部煙突から艦内に侵入した。そのあまりの衝撃にイルミネーターが基部から外れ、海面に落ちる。さらに進む18in砲弾は、最終的に艦底の発電機室まで到達し、14キログラムの炸薬を起動させた。そしてその直上には、後部のVLSセルが存在していた

よいまちづき・艦橋

『っ！！！』

『おぼろづきが！』

閃光の後に現れたおぼろづきは、あまりに無惨な姿を晒していた。艦尾の部分はひきちぎれ、斜めに傾きながら海中に引き込まれようとしていた

ドーン・・・

轟音が光景よりも遅れてやってきた。それが、この光景が現実だと知覚させる

『ああっ！』

そんな状態のおぼろづきに、次弾がふりかかる

『くそ野郎め！あんな状態になってるのに、そんなに痛めつきたいのか！』

乗員の誰かが毒づいた。永野はそれが撃沈を確認する前の射弾だという事を理解していたが、あえて押し黙った。敵をわざわざ擁護してやる必要も無い

『気をつける、漂流物にスクリューをやられたら事だ』

『見張り警戒を厳となせ！漂流物を見逃すな！』

永野の言に航海長は頷いて命令を下す。しかし、それほど針路に余裕があるわけでは無い

『前方に漂流者！』

案の定、脇を通ったみつづきの流れに乗せられ、おぼろづきの乗員がよいまちづきの前に引き寄せられる

『艦長！』

『・・・針路このまま』

恐怖にひきつった顔をした漂流者は、艦の影に入って見えなくなつた。人間の身体でスクリューをやるのは不可能だ、問題は無い、問題は無いのだ・・・！

『艦長、このままではいずれ』

航海長が進言してくる。そんな事はわかっている！

だが、手は無い。早く海峡を抜けて、広い海域に出るしか・・・！  
あるいは

『艦長！トンプリから命令です！』

永野は息を飲んだ。撤退か？撤退！

『指示した地点に投射可能な魚雷を全て投入せよ！です！投入箇所は暗礁です！』

そうか！いや、何と無謀な！トンプリのやろうとしている事は、事前調査も無しに道なき場所に道を造ろうとするようなものだ。それは、魚雷が爆発した所は通れるかもしれない。だが、どれだけ破壊できるかも、その先の安全性も保証出来ない

『そんな事は百も承知か』

そんな程度が想定できないバヤン少将ではなからう。全てのリスクをわかつての行動に違うまい

『水雷戦用意！トンプリの指示あり次第撃て！』

『了解！魚雷発射装置をホットに！トンプリの指示あり次第撃ちます！』

是非もない。今すぐに転舵して逃げ帰りたいところだが、やれることがあるならば、やっていくべきだ

『みつづきに射弾が集中します!』

前方のみつづきが水柱に囲まれる。みつづきはどこまで持ちこたえられる。彼女がやられたら、次は我々なのだ

『魚雷撃ち方始め!』

シュポンツ!!

圧搾空気によって、各艦から魚雷が海中へと踊り出る。

『トンブリ、舵をきります!?!? 艦長! 前方のチェンマイも舵をきります!』

『何故だ!』

トンブリはわかる。だが、前方を進むチェンマイは海峡を出る寸前だった。こんな所で舵を切ったら・・・

『演技か!』

おぼろづきが撃破されたことを、トンブリが撃破されたように見せかけるつもりなのだ。指揮が乱れたように見せかけるのに加えて、トンブリの行う離脱行へのカモフラージュにもなる

『駆逐艦乗りのかがみですな』

航海長が呟く、旗艦のしたいことを瞬時に理解し、その援護となるべき最善と思われる行動を即座に実施する



斉発が可能ときている

後の展開は一方的だった。トンブリの分6発、十門の圧倒的な投射弾量に、砲塔以外は無きに等しいモニター艦の防御では耐え切れるはずもない

『撃ち方やめ、各艦旗艦に集まれ』

バヤン少将がそう命じた時、海上に残っていたのは、日泰海軍の5隻だけになっていた。よいまちづき以外は大人り小なり傷を負っており、勝利とは程遠い姿ではあったが

『駆逐艦2隻を取り逃がしましたな。もう少しよいまちづきが働いてくれれば』

参謀が愚痴る

『仕方あるまい、みつづきがスクリューをやられて迂回航路をとらざるを得なかった』

みつづきは18in砲弾の至近弾を受けて、片舷のスクリューを破損。よいまちづきを塞ぐように動いてしまい、よいまちづきは敵から離れるような急転舵を余儀なくされたのだ。不慮の事態は戦場につきものだとバヤン少将は判断する

『さて、次の状況を作らねばなるまい』

その言葉に、参謀は背筋を伸ばした

『状況を、開始するのですね』

頷くバヤン少将

『状況を開始する。みつづきとよいまちづきへ回線を繋いでくれたまえ、直接説明する』

バヤン少将はあくまでも淡々とした口調で言った

少将のいう状況とはなんなのか、寺津中将の第三艦隊本隊はマレーシアラインを突破できるのか・・・静かな海は遙かに遠く、嵐は止みそうにもなかった

**S e v e n t h      L i f t (第七話) (前書き)**

戦力をすり潰すというのは簡単だ、当事者でないのであれば

Seventh Lift (第七話)

『第61駆逐隊には予定通り撤退していただきたい』

ようやくの撤退命令に心中では喝采をあげつつも、永野はバヤン少将の言ったフレーズの一カ所が引つ掛かった。第61駆逐隊には、の、にはってなんだ。まるで

『我が艦隊はこのまま南下、ジャカルタ砲撃を行う』

バヤン少将は静かにいったが、内容は無茶苦茶だ！

『ジャカルタに攻撃をかけるとなると、貴艦隊の撤退に支障をきたすと思われませんが』

あんたらは一体どうするんだ、という内容を、当たり前障り無く言うてみる

『我々に撤退の意志は無い。援護は不要である』

『そんな！』

死ぬつもりか！こんな所に残ってなんになる。まだ戦いは始まったばかりなんだぞ！？

『・・・我が国は、既に食糧貯蓄が尽きつつある』

『・・・っ！いや、だからといって』

とんでもない事を聞かされたが、今のこれとは関係ないだろう！

『我々は証明せねばならない。我々タイ王国軍は、大日本帝國の為に命をなげうつ事を厭わぬという事を、な』

そしてそれを、いくらでも逃げ場（帝國海軍の根拠地にいれば、食糧くらいはどうにでもなる）海軍の我々が、だ

『宣戦布告を受けてより、我々はもとより生きて帰る気はない』

『・・・』

そんな馬鹿な、ああそうか、だから寺津中将はあんな発光信号を

『ここからは我々の戦いだ。付き合う必要はカケラも無い』

当然だ、そんなもんにつき合うつもりなんぞ

『そうは参りませんな、付き合いますよ』

『っ!?!?』

みつづきの艦長は一体何を言っているんだ!

『本艦は一軸を失って速力を発揮出来ない。撤退には足手まといになるだけだ』

『・・・すまない』

永野は顔を引き攣らせた。また、また逃げろというのか、俺だけ

『みつづき、どうにかならないのですか?』

『無理だ、スクリューの羽根が全て吹き飛んでいる』

片軸推進なのをまっすぐ進ませる為には、舵を大きくきつての航行を余儀なくされる。ろくな速度なぞ出しようがない

『貴艦にはSSTOの乗員が乗っていたはずだ、構うことは無い。彼等を死地から救ってやってくれ』

足が震えた。なんでこんな、なんでこんな目に俺ばかり

『よいまちづき、離脱します・・・ご武運を』

『君もな』

隊内通信は途切れた

同刻・仏蘭合同艦隊

『サイクロプスが敗れただと!?!?』

離脱した蘭海軍の駆逐艦からの連絡が、リシユリユー座乗のリユフエック大将の耳に入ったのはこの時であった。

『ライミーめ、つくづく使えぬ!』

リユフエックは拳をにぎりしめた

『司令、K・ネデリンデンからです』

蘭艦隊の旗艦からだ、邪険には出来ない。怒気を払ってから受話装

置を取る

『単刀直入に言わせてもらつと、本艦をジャカルタに帰還させていただきたい』K・ネデリンデン座乗のフルトナー中將は本題を先に口にした

『我々だけで敵艦隊と戦えと？』

敵の第三艦隊をみすみす逃す結果になる。戦艦の差で二倍、簡単な方程式に当て嵌めて考えれば、こつちが敵の一隻沈めてる間に全滅する

『ジャカルタの政庁舎を失えば、我々の統治能力を疑う連中も出て来るでしょう。昨今の食糧不足で、我々の足元はぐらついております』

暴徒化した民衆、純粋なオランダ人は少数派にしか過ぎない

『インドネシアを失えば、フランスインドシナは孤立する。それはフランスも回避したいのでは？』

・・・痛いところを突いてくる

『現状で沈める隻数、その価値、共に我々の方が上回っています。

その成果をもって英海軍に』

『ライミーにサイクロプスの換わりを要求できる、か』

代替の戦力投入を拒否するならば、我々も考えねばなるまいが、厭味たつぷりにライミーに説教するのもまた良し、か

『結構。永年の敵である第三艦隊に大打撃を与えるチャンスだったのだがな』

『まだ戦争は始まつたばかりです。機会を待ちましょう。蛇のよう  
にね』

『そうか、バヤン君が逝ったか』

寺津中将は嘆息した

『はい、支隊はよいまちづきを除いて全て撃沈との事』

残念だ。しかし、タイの未来を考えればそうするしかなかったのである

『見事、意地を通したな。ある種羨ましくもある』

よく生き、よく死んだ。彼の名はタイ王国の歴史と海軍史書に、永遠に名を遺し続けるだろう

『総員討ち死にはないのが対外的には蛇足とでもいいましょうか。勿論、我が帝國の財産であるアイギス艦を失つても良いという意味ではありませんがね。すり潰し処ではあつたはずです』

参謀はよいまちづきの帰還に否定的な意見を述べた

『そう言つてくれるな。生き残るといふ、我が第三艦隊に必要なスキルを持つ人材ともいえよう。あるいは寺坂吉衛門のような存在、か』

『四十七か、四十六か、で評価がかなり分かりますな。いや、すいません。少なくとも我々がバンダ海を通り、モルツカ海峡を通過できるようにした功労者ですからな』

参謀はアメリカ人のように肩をすくめる

『問題は次、であるが』

寺津中将は参謀にもう喋らなくていいと手で抑え、思考を開始する。タイは間違いなくフランスインドシナへ大攻勢に出るだろう。食糧供給を求めて、より我々に近い港湾施設を必要とするに違いないからだ。火山灰の降灰量から機能不全に陥っている所も少なくないが、物資の集積地であるから、略取にも適している。

だが、これを支援するために戦力は割かない。ここの人間の多さは、フランス側の負担として大きいからだ

『西ティモール』

寺津の頭に浮かび上がったのは、先程傍らを通り過ぎたその地名で

あった。そこならば蘭領インドネシアに楔を打ち込めるとともに、オーストラリアへの牽制にもよかるう。なによりも、占領するにあたって他の場所に無い利点が一つ存在する。それは……

### 中立という名のトラップ

**Eighth Lift (第八話) (前書き)**

キスシーンぐらいなら、R115はセフセフ？

## Eight Lift (第八話)

2001年11月15日・東京千代田区

『我々は、400年来の交流方が消滅することを良しとはしておりません』

急に来訪したいといつてこのポルトガル大使館に現れた日本の外務省官僚は、ある書類を差し出して、それだけ言い放つと席をたった『無礼な!』

ポルトガル大使は外務官僚が立ち去った扉に灰皿を投げ付けた

『我々がアゾレス諸島を英国無しに維持できるともおもっているのか!』

アゾレス諸島、ポルトガルは第二次世界大戦でも連合国に対してかの諸島を貸借し、連合軍側寄りの政策を採っていた。そして今回も、英国に仕方なくという形で貸し出すようにしていたのだが、決して日本の心証に悪くないよう、マカオをそのようにする話が出ていた。それを!

『しかし大使、既にスペイン陸軍が国境線沿いに展開している現状では』

駐在武官の陸軍大佐が指摘する

『日本側に立てば、沿岸都市はすべからく英国からの艦砲射撃を喰らうぞ!』

大使と陸軍の駐在武官のどうにもならないやり合いをみながら、海軍の駐在武官の大佐はため息をついた

『先代のフランコであれば、多少は採る手があったのでしょすが』  
現在のスペイン政権は、フランコ死去の後一代開いて新進気鋭とい

われるフランコの親類、ファン・リグルが采配を取っているのであるが、ファーストレディは日本人、ユウカ・カザミとか言う女を娶っていて、完全に立場は日本側である。

先代であれば多少は慎重さが期待出来たのであるが、彼等は日本がやれといえ、喜んでやるだろう

『敵味方を区別せねば、戦えぬ訳でもなかるうに』

何を日本は焦っているのだ。例え参戦した所で、英国にかかれば我々の経済的な価値も戦力も、最短で一週間のうちに消し飛ぶものではない

『焦り、でしょうな。議論白熱中、失礼させてもらいますぞ』

『!?!』

入って来たのは、第二種軍装に身を包んだ

『寺津中将!』

第三艦隊は必然的に諸外国の艦艇に関わることが多い、何度か寺津もポルトガル大使館に足を運んだことがあったのだ

『何度か係の者に呼び掛けていただいたのだが、返事がないのを、失礼を承知であがらせていただいた』

『それで、何の御用ですか？』

大使は不機嫌さを隠さずに聞いた。聞かれていたなら今更どうにもならない

『貴国には中立を貫いていただきたい。アゾレス諸島の貸借に関しても、我々は干渉致しません』

『これは異なる事を、先程の外務省の言葉は大日本帝國としての言葉であるはず、海軍の一将が関与出来る話ではありませんまい?』

寺津は首を縦に振った

『政府、いや、外務省はそう考えているでしょう。しかし、今は戦時なのです』

外務省は自分達の仕事が無くなる前に、何らかの得点を得ようと考えた。どの国が敵で、どの国が味方かはつきりさせるのはその大きなチャンスだ

『答えを求めぬ曖昧さもまた、我が国の美德と私は考えております。  
・・・これを』

寺津が白手袋をつけ、持つてきなさいと外に声をかける

『まさか!』

大使は呻いた

『我が艦隊が大戦もおいくさなく海峡を突破し、SSTOの乗員をあまさず救えた事が、陛下の大御心をよくあそばせ、畏れながら謁見の機会を賜りました。その折りに』  
菊の御紋のついた桐箱を差し出される

『戦を広げてはならぬ、関わり無き者に火の粉を被せてはならぬとのお言葉を賜りました』

『な、なんと!』

この国の最高権威からお墨付きを貰うというなら、これ以上の保証はない

『我が大日本帝國は、400年来の友邦を、無為に失うつもりはありませぬ。先程の外務省の無礼、心より詫び申し上げます』

寺津は頭を下げる。大使や陸軍の駐在武官は半ば泣きそうになっている

『ご、頭を上げてください、寺津中将! 貴方は我がポルトガルへ福音をもたらせてくれました!』

『おい! 早く茶とカステラをお持ちしろ!』

そんな二人を見つつ、海軍の駐在武官は考えていた。陛下からの言葉というのは本当だろう。それについての嘘はこの国では不可能だ。しかし、信じていいのか? あまりに虫が良すぎる

一時間後

『外務省にも困ったものだ』

次の作戦には、ポルトガルの中立が必要不可欠である。それを崩される訳にはどうしてもいかなかったのだ。それに、それはあまりにも国家として品格がなさすぎる。我が国は世界に冠たる覇権国家なのだ

『・・・海軍省へ頼む。多少待たせてしまったが、次は第四艦隊の説得だな』

境界の4艦、海上警察と着上陸を司る艦隊、彼等を動かす必要がある。勿論、連合艦隊司令部から命令が出ているので戦力は集まる。しかし、頼みにいくのといかないのでは状況がまったく違ってくる。礼は尽くさねば。敵にも、味方にも、な』

同日・佐世保、よいまちづき艦長室

『何でまだ貴女が居るんです!』

永野は頭を抱えた。一週間ぶりに艦長室に戻って来たら（CICや艦橋の座イスで仮眠をとっていた）まだ彼女がいた

『し、仕方ないでしょ!他のみんなみたいに原隊に復帰したくても、潜水艦が出てつたり帰つたりしてくるのは不定期なんだから!』  
いわゆる遊兵というやつである

『別に宿舎に戻つたつてよいでしょうに』

なんというか、ね。一週間以上女性が部屋に居たとすると、これだけ、その甘つたるい匂いというか

『・・・お礼を、まだ言つてなかつたじゃない』

『はい?』

『どういう事だ』

『あ、あんたは!一応さ!私の命一回も助けてんのよ!?!それを理解しなさいよね!』

『フリリピンでも、インド洋でも』

『あ、ああ。そう、なるのか・・・』

『・・・あ、ありがとう』

『顔が真っ赤だ。そして多分俺も』

『あ、ああ・・・ありがとう』

何と言うか、そのあとの言葉をお互いに失う。しばらくそのまま見つめ合ったあと、先に動いたのは月海の方だった

『・・・め、目をつぶりなさい!』

『そういわれて襟元を掴まれる』

『お、おい!?!んっ』

『唇が触れ合う。やばい・・・』

『んんっ!?!?』

腰を引き寄せ、後頭部を掴み、月海の口の中に舌をねじ込んで舌を絡ませる

『んっ、んくっ・・・』

『口の中の唾液を流し込んで飲ませる』

『ぶはっ!』

『お互い息が詰まって口を離れた』

『な!なにすんのよ!』

『馬鹿、俺も聖人君子じゃない。欲情ぐらい、する』  
『というか、いくらなんでも今のは性欲を持って余す』

『ひゃあっ』

『頭を掴んでいた手で、胸を服の上から覆い、さする』

『遊兵は、効率運用しなきゃな』

『我ながら、なんという悪役の台詞。だが、自重しない』

『ちよ、調子にのんなあああつ！』

ガツキーン！（金的な効果音）

英領スリランカ、コロンボ

『ま、マレーシアラインの守備には、獅子王姉妹を全部と、空母4隻でいいんじゃないか、と思うんだけど、どうか？』

英国海軍の極東艦隊司令部に赴いた仏蘭の両司令官は、突然の人事変更で英国本土から派遣された新司令官の言葉に啞然となった

『ぼ、ボクはさ、ほら、こっちに始めて来た訳だからさ、慣れた人にしてもらうのが、当然だと思うんだけど、なあ・・・ダメ？』

『いえ、ダメといえますか、ペンウッド大将、よろしいのですか？極東艦隊のほぼ全力ですよ？』

ペンウッドはもじもじと手を動かすと、上目使いで二人を見て言った  
『正直手元のセインツも預けたいぐらいだよ。だって、日本海軍で物凄く強いでしょ？卑怯なくらい技量がたかくて、ぶっちゃけうちの艦より性能は良いし、緻密な戦略を基にして攻めてくるんだからううっつ、と脂汗を浮かべてペンウッドは唸り、二人を見た

『全力投入は当然だよ、僕にできるのはそれくらいで、指揮なんか二人に較べたらとてもとても』

・・・どうするよ、これ？と、二人は顔を見合わせる。ともかく、

戦力が大幅に増えるのは喜ばしい事だ

「大丈夫かなあ・・・」

それはこっちの台詞だ！との叫びを飲み込み、二人の提督は敬礼して席を立つ。何はともあれ、立ち向かって行くしかないのだ

戦機は両軍とも、再び熟しつづつあった。しかし、思いもよらない陥穽は、その顎を拡げて大魚を飲み込もうと待ち構えていた・・・その陥穽の名は、《聖体》という名の焰

## 作中兵器紹介（砲戦ドクトリンも含む）

この世界の艦砲に関する点について、皆さん疑問じゃないとは思いますが、俺が書きたいから書く説明の回です。それではさっそく

### その1・RAPについて

大砲の射程延長について考えられる手は三つ、発射弾体に推進剤を詰むか、空気抵抗を減らすか、初速を上げるか、です。

発射弾体に推進剤を詰む方法はミサイルと変わりません。距離はかなり稼げるでしょう。ですが、難点は砲弾に推進剤積むわけだから威力が全く期待できません（砲弾に積める推進剤にかなり食われる）それに、長射程であるが故に命中には誘導装置が必要となった為（100キロを越えるとなれば当然だ）更に威力と、ミサイルと同様に装甲貫通力を失ってしまうので、兵器としての用を為さずとお蔵入りしています

次に、空気抵抗を下げる方法になりますが、これはRAPやAPSFDSが該当します。RAPはロケットアシストの名の通り推進剤を少量搭載します（故に炸薬は少し減ります）が、これは飛ぶ為のものではなく、砲弾後部に発生する空気抵抗の渦を消すものです。なぜ、この作中で戦艦砲弾にRAPが使われたかと言うと、戦艦が持つ巨砲であれば威力の低下もある程度で済むし、なにより、射程もミサイル砲弾程でない為誘導装置が必要とせず、なおかつ貫通力に問題が発生しないのが大きい利点だったからです

では、APSFDSはというと、確かにとんでもない貫通力を持ち

ますが、長距離の砲撃には完全に向かない砲弾かつ、抵抗を少なくするために細長くした弾体、装弾筒は砲弾そのものの威力を下げ（戦車は砲撃距離が短く、戦車内の空間も小さいので使われるのだ）安定翼は横風を受けて容易に砲弾の弾道を歪ませるとあっては、不採用とせざるをえなかった訳です

では、最後の初速を上げる方法。これにも二つのやり方があります。一つは口径長を長くする事、大和級の18in主砲を45口径から50口径に変えたりするのは良く見かけます。間違いではないのですが、この世界では主砲口径と口径長は条約で延ばしては駄目となってますので、砲の数字は元のままです。数字を変えずに新式砲に変更は出来るので、実際のカタログはかなりとんでもないことになってます

そしてもう一つが強装薬、弾を撃ち出す火薬の量を増やしてしまえばいいという、単純かつ明快な方法であります。史実アイオワ級もこのやり方で44キロの射程を記録していますが、砲は開発した当時のままだったのもあってか、案の定爆発事故を発生させています。この世界では砲開発の予算がかなり投入されているため、かなり大量の強装薬でも撃てるように改装が各艦で為されており、8in砲でもかなりの射程を持つようになっております

## その2・核砲戦について

この世界の大国に所属する戦艦と重巡は、常に核砲弾を門数分だけ搭載しています。弾頭は20ktを基準に、RAPによる最大射程ぐらいで撃ち合うのが想定されています。至近距離で使わないのはEMP対策の為だけでなく、近距離であれば相討ちになる可能性が高いというのが考慮されたからです。

この20ktの核弾頭の空中爆発による危害半径は爆心地より400メートル（史実ビキニでの酒勾のデータによる）この範囲に急転舵で着弾予測地点から離れられる速度を各主力艦艇には改装の際求められています。数値的な物でいうと、最悪直線で一分（対砲レーダーで着弾地点がおおよそが知れて、残っているであろう時間を想定）で1000メートル走り切ることができれば、直撃は避けられるわけですから、最低29ノットが発揮できる事が必要と言つのがわかるでしょう。

勿論、人間的な損害は免れませんし放射能による身体への障害も考慮されますが、兵員は海戦内で耐えられればそれで十分ですし、後は艦体の洗浄後入れ換えれば良いと帝國海軍は考えております。ですので、パイロットと同じく戦艦と重巡にはもう1セット乗員が本土に控えるという形を採っております

なお、本気で核砲戦を行うつもり帝國海軍は、その最初の決戦場をチリ沖合、ガラパゴス諸島近辺の島嶼が存在しない（回避行動をニューヨークリアガーデン阻害されない）海域としておりこう呼んでいます。核の園と

以上が大まかなこの世界での遠距離砲戦のドクトリンとなります。架空戦記でもわかりかし核や超兵器が最終兵器みたいな感じで、使えば終わりみたいな感がありますが、どう核のパイ投げを行うか考える一助となれば、幸いです。

N i n e t h L i f t (第九話) (前書き)

生き残り

## Nine th Lift (第九話)

2001年11月21日・沖縄沖、いまちづき艦長室

『出血点』

『はい？』

永野の言葉に、月海は首を傾げた。部屋に戻って来ていきなり何を言ってるのこいつ

『この戦争で何が必要とされているかを考えてみたんだ。少し付き合ってくれ』

『・・・従兵として、でしょうか？』

ちなみに遊兵になってしまった月海だが、出撃までの時間が短かった為、永野の従兵としてよいまちづきのクルーになっていた・・・傍からみたら、愛人？

『聞いているだけでいい』

永野は執務機の椅子に座り、月海にはベッドに座るよう手で射す

『衛星の観測で、敵はインド洋の東洋艦隊から相当の増援を得た事が把握されている。具体的に言えばライオン級の五隻、な』

『リシユリユー級やネデリンデンと合わせて八隻になったわけね』  
頷く永野

『敵はそれを二分した。一つはタイ陸軍のフランス領インドシナ進攻阻止と、その支援にやってくるかもしれない我々の阻止の為に。そしてもう一つはハルマヘラ島周辺からの、我々の進攻阻止する為だ』

月海は首を傾げた

『なんだ？気になったら好きに言ってくれ』

『ハルマヘラ島とか含めてこのあたりの島って、正直聞かない場所

「ただどさあ、攻める価値あんの？」

「・・・根本的などこから聞いてくるなあ、だが、逆にいいか

「ハルマヘラ島周辺の諸島は美しいだけで、なにもない・・・という訳でもないが、油田とかで有名なボルネオ島らに比べればそう言える。ピナツボ火山の噴火後は食料生産量も下落してなおさら、だ」  
「でも、その価値の無いところを。西ティモールだっけ？うちは取るうとしてるよね？」

敵はわかるのよ、海峡を抜けて好き勝手やられたらたまらないものでも、私達にとっては違う

「無理に戦う必要は無いんじゃない？それこそタイ支援に敵艦隊の撃破に向かった方が確実でしょう？」

永野は頷いた

「そう、それがオーソドックスな戦術だろうね。敵は我々だけでなく他の方面に目を向ける必要がある、そこを横合いからぶん殴る。

実にオーソドックスだ」

月海の顔が真っ赤に変わる

「ちよっと！オーソドックスオーソドックスって、私をおちよくってるわけ！？」

「違う違う、それが最良なんだ。だから、それをしていないというのが問題になってくるんだよ」

両手を横に振って宥めながら永野は言う

「で、俺はここを出血点にするつもりじゃないかとかんがえたんだ」  
俺達第三艦隊は敵よりも兵器の質量共に落ちるようになった

「敵は今なら間違いなく俺達を撃破出来る。だから、機会があれば間違いなく狙ってくる」

後はそれを凌げば良い、最悪同数の被撃沈を続ければ敵の戦力は枯渇する

「・・・それって、めっちゃ私達大変じゃない？」

不利なまま戦い続けなきゃならないんだから

「そう、だから当然損害が出る。しかし、そうでなくては敵が積極

的に出て来る理由がなくなる』

『・・・うつわ、最悪』

そりゃ戦法としては正しいかもしれないけどさ、実際戦ってる私達の命は一つしかないわけで

『一応この艦はアイギス、防空艦だからこの前のようにきつたはったの水上砲戦をやるはめにはそうそうならんよ』

それに次は戦艦付きだ。俺達はプリマでは無い。それだけでも生存率が上がる

『形勢次第では水上砲戦になるまえに撤退が決まる可能性だってある。一発も撃たずに済む可能性も、な』

『楽観的なのね』

呆れた風に月海は答えた

『・・・そうでもなきややってられん』

編成上よいまちづきは僚艦を失ったままであり、鬼子である。実際の所、何処に投入されるか解ったものでは無い。

『なにはともあれ、生き残らなきやなんにもならん。だが、我々には作戦を変えるような力も無ければ権力も無い、それだけは確かだ』

『な、なによ？』

月海を見つめ、よいまちづきの乗員達の事を考える

『どうかしなきやならんが・・・すまない』

死なせるわけにはいかんよな、うん。だが、確実にそれを避けれそうな手は一つも浮かばない

『それが出来たらあんた自身が第三艦隊になんていない。そうでしょうっ。』

月海はニカツと笑う、その笑顔が永野の思考を停止させた

『そう、だな』

人は出来る事しかできない、それ以上を求めた時に破綻が訪れるのだ。今は、まだ待つしかない。何か出来る、その時まで

2001年11月24日、ハルマヘラ島上空

《こちらStt-201（空母薩摩所属・第二戦闘機中隊）リーダー、ハルマヘラ島上空に差し掛かる》

《ロージャ、Stt-201リーダー、先行せよ。蜂の巣をつつけ》  
管制の崔雲から指示が下りる。雲量は2、快晴といていい。電波状況が少し気になるノイズを孕むぐらいで、戦闘には問題無い《各機、聞いたな？事前の打ち合わせ通りだ》  
全機がバンクをうって答える。

『さて、どいつが出て来るか』  
無線を切って呟く、オランダのヤクトフォッカーか、イギリスのハルピユイアか。

余談だが、ソ連のYak社がフォッカー社に合併されて出来た（ドイツ系の社員が、社名のYakをヤークトに変えた）ヤクトフォッカー社の機体は迎撃性能に優れる。インドネシア配備のおおよそはフォツカーXXIX（29型）であった  
ちなみにハルピユイアはラファールに影響を受けた艦載型タイプ  
ン改修の事である

《迎撃に上がる敵機を捕捉した。基地航空隊だ》  
つまり、敵はヤクトフォッカーというわけだ

《各機、轡を重ねよ》

薩摩戦闘機隊は部隊章の重ね轡（さすがに本家の轡十字は気が引けたため、新納家の家門の意匠を受けたのだ。轡十字だと射的の的っぽいというのもあったが）にかこつけて戦闘開始の言葉を吐く。轡を重ねる、つまり敵に照準を合わせるという意味を持たせたわけだ  
《撃ち方始め！》

一斉に各機から長距離対空ミサイル、鳳凰が放たれる。性能自体は新型の飛鳥や、敵のミーティアより劣るが、射程に関してだけは未だ世界一だ

『槍合わせを四合、頭は押さえさせて貰うぜ！』  
碎風は鳳凰を六発搭載できるが、それだと中近距離で使えるミサイルがなくなるので、四発搭載でのソーティがデフォルトであった。それで、四合。

ECMを始めとして撃たれた方は何らかの防御措置、特に回避行動等を行わなければならぬため、必然として敵は運動エネルギーを失う。そこに上から覆いかぶさってやるのだ。まさに弾幕はパワーだぜ！

《命中3！突入！突入！突入！敵はさらに戦力を投入中、乱戦に持ち込め！増援をすぐによこす！》

9機四発、36発撃つて撃墜が3、命中率は8%弱、そこそこだな  
『回避ご苦労、そしてさよならだ』

この圧倒的な位置取りが取れるのを加味するならば

ヴォツ！

回避運動で運動及び位置エネルギーを失った敵の機体に、25ミリ機銃を叩き込む。翼を叩き折られた機体はキリモミしながら落ちていった

同刻、A E W 崔雲

『薩摩戦闘機隊が交戦中』

タクティカルオペレーターがモニターを見ながら報告する

『何機投入できている』

『三個中隊、27機です。中隊ごとに槍合わせで牽制しつつ逐次投入。一個中隊が本機の護衛に』

タクティカルオペレーターのリーダーは嘆息した

『そこまで艦名に合わせなくともよかるうに』

薩摩の碎風は残り四個中隊、モニターと武装のオーダーを確認して確信する。これはあれだ

『交戦中の中隊をあまり被害が出る前に退かせる』

『今退かせたら阻止になりませんが？』

寡少な戦果に及び腰の攻撃では、相手を勢いづかせるだけにならないか

『構わん。集まればよい』

『は、はあ・・・』

意味が解らないが、何か策があるのか

『釣り野伏を現代戦、しかも空戦でやるか、普通。まったく、度し難い連中だよ』

追撃に移った敵の迎撃部隊に、216発の長距離対空ミサイルが襲いかかったのは、それから10分後の事だった

『まずは重畳、といったところか』

敵の第一次のファイタースイープは失敗に終わった。こちらが碎風の6機を失い、敵は41機を失った。まあ、一気に自艦の機を出し過ぎた薩摩は作戦能力が一時的に落ちてしまったが、信濃の艦載機は艦隊上空の直掩で温存している状態にある。なにも問題はなかった。本作戦に於いては、航空優勢の可否が大きく係わる。薩摩の働きは実に大儀』

『伝えておきましょう』

寺津の言葉に、傍らの幕僚が頷いた

『敵の空母は四隻、この周辺の敵航空戦力を含めれば400機程、また幾度かは厳しい戦いを強いるな』

死んでいく将兵にはいずれ報いねばなるまい

『ん？』

CICの対空モニターから、味方の機影の一つが掻き消えた

『何事か！』

敵は近くにいなかったはず

『現在信濃に問い合わせ中です・・・な、なに！？』

オペレーターが驚愕する。その間にも再び何機かが消える

『対空警戒！ステイルスカ！？』

『違います！これは・・・！』

オペレーターがあまりの事態に絶句するが、そうしていても何の解決にもならない

『上空で大規模なセントエルモの火が発生しています！』

火山性の細かな粒子が帯流していて、そこを直掩の信濃戦闘機隊が同じ空域で掻き回した結果、たまった静電気が一気にバーストした。というのは戦後の調査で判明した事である

『セントエルモ・・・馬鹿な！そんな事があってたまるか！』

幕僚達が青ざめる。航空優勢があつてこそその本作戦、というのはさつき寺津中将が言つた通りだ

『航空隊の被害極限を最優先、かかれ！』

寺津が叫ぶ。予想外の事は起こるものだ

『しかし閣下、これでは・・・』

たとえ機体や乗員を救えたとしても、とても作戦を継続出来る状況ではない。

『我が艦隊に所属するアイギスの全てを前進配置、限定的な防衛スクリーンとする』

『閣下！』

先の海戦で2隻のアイギスを我々は失っている。ここでまた大きな損害を受けたならば、この第三艦隊は防空能力に大きな穴を生じさせることになる。勝つても負けてもだ

『・・・』

寺津は幕僚に何も答えず、各艦の名前が映し出されているモニターを睨みつけて呟いた

『矛盾、か』盾を矛の前に晒す。これほど現状を正しく表した言葉は無い

戦いは予期せぬ事態により困難さを増し、第三艦隊を苦しめる。よ

いまちづきは果たして生き残る事が出来るのか。モルツカ海峡波高し！

N i n e t h L i f t (第九話) (後書き)

感想、評価をお待ちしております

## Tenth Lift (第十話)

2001年11月25日、モルツカ海峡・よいまちづき

寺津中将の命により、第三艦隊のアイギス艦10隻と対空軽巡の蓬萊が前進配置としてモルツカ海峡に侵入しようとしていた。

『防御スクリーンとしては、確かにたいしたものだが』

永野はモニターを見ながら呟く。月海も傍らで目をぱちくりさせながらCICを眺めている。

何故彼女がここにいるのかというと、従兵としての配置であれば主計科預かりという事になるが、未だよいまちづきに慣れていない訳ではない彼女。しかも戦闘となれば主計科も鉄火場になる、そんな所に素人がいたら邪魔でしかない。ならば、要員はコンソールにほぼかじりついて動かないCICであれば邪魔にはならずにすむ・・・実際は気休めにしかないが、一番安全な所へという永野の配慮である

『砲雷長、対空迎撃の事なんだが手を抜いてくれないか』

『・・・どういことですか？』

砲雷長は聞き返した。手を抜くとは、自艦に被害が及んで良いという事ではけしてあるまい

『ただじゃすまないだろうから、な』

わざわざ固めているところに航空機をぶち込む馬鹿はいない。最低でも対艦ミサイルをぶち込んで保有する対空ミサイルを減らすならいの手を使ってくる筈だ

『最初に消耗したそこから沈められる。それが戦の習いだ』

『なるほど、解りました』

全力迎撃は敵に利する可能性があるわけか

『・・・それから、対艦モードもすぐに移行出来るよう用意しておくように』

永野は目をつぶって言った。対空ミサイルでは威力はまったく期待できないが、撃ち込む事が出来るというのは大きい

『前に出た対空艦を、敵が放っておくわけがない』

水上砲戦になる。水上砲戦となれば、アイギス艦は普通の駆逐艦とかわらない。戦艦や重巡とやりあえば、藁の如く打ち倒されるのは、ナルウ、イクの先例を出さずとも目に見えている

『・・・』

指示を出し続ける永野に、月海は少し見とれていた。こいつ、こんなにかっこよかったっけ？

同刻、ティモール島沖合・コンカラー

日本側からは獅子王姉妹と称されるライオン級。彼女達は第二次世界大戦終結後、強大な戦艦群を以って太平洋を制した帝國海軍に、多数の戦没艦を出したQ・E級、R級では対抗できないとして早急に整備が行われた大英帝国海軍のワークホースである

『敵が前進配置をしているとは、好機』

フルトナー中将は顎に手を当ててそういった。彼はオランダ海軍の将官で、本来K・ネデリンデンに将旗を揚げるべきであるのだが、性能面でもライオン級がネデリンデンより上であるし、なおかつ随

伴艦も英国籍が多い、そうなれば旗艦に自国の艦船を敢えて選ぶ必要もなかるかと移乗してきたのだ

『しかし、畏ではないでしょうか？これは』

幕僚が疑問を提する

『我々をおびき寄せる為か？それはなかるう』

であるならば全艦隊で向かって来たら良いのだ。我々は否応なしに戦わざるを得ないのだから。被害も一団になっていた方が逐次投入にならず、小さく出来るはずだ

『敵は撤退しようとしている。この配置はその為だ。』

こちらの航空攻撃等を抑えつつ、遅滞戦闘を行わせる。撤退しつつの戦闘であれば、機動性の高い駆逐艦ら軽艦艇が一番適している。なにより、敵のアクシデントは致命的であったと言っている程の代物だった。撤退もやむを得まい

『そうであるならば、我々は前に出ずともよろしいかと。重巡以下で撃破出来るはずですし、追撃もやりやすいでしょう』  
幕僚はなおも食い下がった

『いや、撤退追撃戦は海戦でも最も難易度が高い』

日本海海戦は丁字が素晴らしいのではない、そんなものは帆船時代からある。素晴らしいのは必死に逃走をはかるバルティック艦隊をほぼ全て捉えて沈めた事だ。そしてこれ以上の追撃戦は、第二次世界大戦を経ても発生しなかった

『我々のような合同の艦隊ならば、一撃に最大火力を投入するのに専念するのが当然の帰結だ』

『では、せめて予備攻撃を行うべきではないでしょうか？』

『対艦ミサイルでかね？』

フルトナーは少し考えてから笑った

『敵はアイギス、その保有する対空ミサイルは50発ほど、それが10艦、命中六割と考えて、300発以上の対艦ミサイルを用意、話半分としても150発だな、を越える量が必要とする』

おそらく対空ミサイルを対艦ミサイルに転用することを彼は心配し

ているのだろうか、射程はそういった用途に使うための物では無いので、おおよそ射程は水平線ぎりぎりの30キロ、しかも、中の炸薬は30〜60kg程度、加えて表面爆発。これを恐れて、対艦ミサイルを150発以上、それはないだろう。いくらなんでも  
『却下だ。艦砲でやる。それで十分だ』  
フルトナーは帽子をかぶり直した。議論は終わりだというような仕草に、幕僚は黙るしかなかった

モルツカ海峡入口、長門・戦闘指揮所

『貴公らには、申し訳ない仕儀になった事、お詫び申し上げます』  
寺津はモニターの向こうに頭を下げた

『中将、それは違えますあ、第三艦隊の諸艦が賭けなくて良い命賭けてるつてのに、俺達が命たまあはらねえなんて我慢できねえ相談ですべらんめえ口調で、その男は寺津の謝意を遮った

『極上の鉄火場を用意して下さった事、感謝いたしますぜ』  
そういつて彼は敬礼をし、映像は途切れた

『……』  
寺津は瞑目する。良い男達から先に散っていく  
『閣下』

参謀長が声をかけると、つぶった目を見開き、立ち上がって寺津は号令した

『鈴蘭が飛ぶ、全艦最大戦速！前進部隊と合流せよ！』

空に鈴蘭が舞う、その毒は果たして英蘭艦隊に効果をもたらすのか。動き出した第三艦隊本隊は、前進部隊が壊滅するまえに合流出来るのか？時は止まる事を知らない

## 主人公ら紹介（前書き）

いまさらながらに主人公達を、おまけに宗教問題もあるでよ

## 主人公ら紹介

永野 修

ながのあやむね

今作の主人公、27歳、中佐。少尉候補生を1年、少尉から大尉までを2年ずつ勤め、早めに少佐になった（大尉ぐらいでもっと待たされる可能性が高い）のは良かったものの第三艦隊配属でエリートコースからは外れている。ピナツボ火山噴火時の救出活動等の功績と、戦時任官のプロトタイプとして中佐へ昇進、よいまちづき艦長に捕される。術科は砲術

苗字からわかるように永野修身大将の孫にあたり、高知県出身。祖父に似たのか、普段はおっとりと考えに耽るのを常とし、無精である。そして、これ！ときた女性には積極的に行き過ぎるくらいが・  
・  
酒類は苦手、ただ食事は痩身な見た目に合わず、かなり食べる。衣服は無頓着、制服でイナフが彼の言。

大村

月海

おおむら づきみ

一応ヒロイン。歳は25歳で中尉、海軍潜水学校で水中作業技能を取得して任官された。少尉候補生1年、少尉2年、そして中尉とし

ての2年目にあたる。何故大尉に昇進していないのかというと、だいたいの女性軍人がこの辺りの歳で結婚して辞めてしまうのと、尉官の長として隊の頭に立ちにくいようにする海軍の配慮である。そのかわり大尉である期間は短く、少佐にすぐ進級できるので、男女差別と批難されずに済んでいる

話は逸れたが、月海は名前の姓がまんまであるのでわかりやすいと思うが、肥前大村氏の血縁にあたるため、結構なお嬢様だったりするのだが、そんなオーラはカケラも無い。宗教はカトリック、カクレではない。当然ながら長崎県出身、父方が同県出身の柳本中将（史実蒼龍艦長）と知り合いで、佐世保に彼女を連れて良く出歩いたのが今の職場を選んだ遠因である

といっても両親は（特に母親）海軍入籍に最初から反対であり、絶縁状態に近い。とりあえず胸は81くらいで小さくはけしていない

## 宗教問題について

この世界では英国植民地の独立は果たせておらず、また、独立はしても属国並の自主性しか持ち合わせていないので、イスラム圏はほぼ英仏の支配下にあり、敵の敵は味方という事でイスラム宗派は枢軸各国と接触を行っている。日本は多神教、しかも強制されなきやどんな神様でも食っちゃまうド変態という訳のわからん国なので良いのだが、一番近くて力のある国はというとイタリアなわけで、ここに問題が発生するのである。

そう、イタリアはウァチカンのあるキリスト教総本山、そこに頭

を下げるなんざ、死んでも出来ねえ！という意見が多数であり、それがイスラム世界の進展を阻んでいたのである。これを変えたのが、ヨハネ・パウロ二世その人である。

この教皇様は自ら利害関係抜きにイスラム宗教者社会へ周囲の反対を押し切り、二度のテロと負傷すら省みずに胸襟を割って話すというウルトラCをもって枢軸とイスラム間の仲裁を成し遂げるのであった。しかし、これを良しとしない旧守、あるいは敬謙過ぎたともいうべきフランスのカトリック神父連合は、教皇を異端と称し、反乱を起こすという凶事により、残念ではあるがその功績は打ち消されてしまうのである。また、枢軸側首脳からもさすがに、教皇倪下の政治利用になりますので御自愛くださいと釘をさされたらしいが、それでも世界中を気ままに飛び回るお茶目さんぶりを発揮しており、各地で信仰を集めている。どこぞのオンバシラ様も真似をしようとしているらしいが、真相は不明である

**E l e v e n t h   L i f t   ( 第 十 一 話 )   ( 前 書 き )**

**貴方とお茶を**

## Eleventh Lift (第十一話)

『各艦、弓を放て』

後にハルマヘラ島沖海戦と名付けられる海戦は、このみつづきからの一声から始まったとされる。アイギス艦10隻、80発の対艦ミサイルの発射、そのただ中によいまちづきは居た

よいまちづきCIC

モニターには各艦の放った対艦ミサイルの航跡を示している

『これで我々の対艦攻撃能力はほぼ無くなった』

あるのは魚雷8発にパラシュート降下のVLA、とても攻撃力とはよべる物ではないし、その攻撃が可能な距離では、既に砲弾が降って来ている

『たしか、最低でも命中確率が発生するのが、6発、だったわね』

その言葉を口にした人物を永野は見て、少し驚く。月海だった

『なによ?』

『いや、なんでもない。奇跡的な命中率でも命中するのは、13発。』

『そう話している間にも、英蘭艦隊の迎撃によってミサイルは減っていく。』

『話半分の半分かな』

勿論端数は切り捨て、3発となると

『敵艦2隻に命中弾！1隻は行き足止まります！』

ミサイルを示す光点と重なった敵艦を示すシンボルが1隻、その移動速度を落としている。こいつは殺つたな

『さて、きつい返しがくるぞ』

一体何倍返しになるか

『艦長！！！！』

対砲レーダーの要員が振り返る。22個の波紋が表されている。艦首部にある主砲の斉発、インドシナ方面に行ったりシユリユー級でなくてよかった。あれだったら、さらに砲弾が増えていた筈だ

『ダンスを始める、航海長！』

艦橋への回線をつなぐ。此処で砲弾の着地点を見ながら操舵するのは、艦長は艦橋にいて要員に報告させる、オールウェイズオンデツキの我が海軍の伝統には反するが、自分としては伝達が悪かつたせいで被弾した。としないように、ここで指揮した方がいい……いや、怖いのだ。砲煙弾雨の海上を、この目で直接見るのが

『足を踏まぬよう願います』

僚艦のシンボルを言われて確認する。うん。全速力で走り回るにはちと狭いが、幅はある。ありがとう航海長

ぶるぶるぶるっ

『あ……』

月海は永野の手が震えているのを目撃した

『運動は舵をなるべく切らない形で突き進む！敵随伴艦艇の射程に

入ったら、6 in以下の砲弾はデータから除去！魚雷発射管をホツトに！発射タイミングはこちらで測る！」

一発で大損害を受けかねない8 in以上の砲弾だけ対応する。でなきゃ、すぐ飽和してしまうだろう

『断じて行えば鬼神もこれを避く！チャンスは奴らの足元にある！』  
そこで永野は言葉を切った

『諸君！生き残るぞ！』

同刻・コンカラー

『たいした馬鹿どもだ』

フルトナーは毒づいた。被弾したのは2隻ともオランダ海軍の駆逐艦だった。これほどの恥辱は無い、英艦にくらべて対空能力が低いと喧伝しているようなものだ。払拭するためには完膚なきまでに叩き潰すしかあるまい

『・・・どうした。英海軍は見敵必殺が信条だろう？獵犬が前に出ずどうする』

随伴する英海軍の巡洋艦戦隊、重巡のマルス、フォボス、ダイモス、そして大型軽巡のスウィフトシユア、ミノトー、ホークの6艦からなる戦隊を顎でさす

『お待ち下さい！随伴を減らすのはまだ早過ぎます！』  
幕僚が食い下がる

『敵は随伴艦へむけ対艦ミサイルを放ちました。これは何らかの攻撃準備かもしれません！せめて本隊の艦砲で露払いをしてのちに・

・！』

やられ始めてからの小細工は難しい、精神的にもそうだ。そして、

敵は撤退するはずが突っ込んで来ている。この差異は大きい

『ティータイムを提案致します』

『君は何を言っているのかね!』

フルトナーは激情した。こんな時にお茶をよこすなぞ、わしを馬鹿にしているのか!

『主計に既に用意させております。セイロン産の極上品で、飲む前に一分間蒸らすと味が』

『もうよい!CICに下がりたまえ!巡洋艦戦隊前進!』

これだからブリテンは!

『・・・下がります』

こう言われては、幕僚も引き下がるしか無い。艦橋から出て、彼はため息をついた

『ペンウッド提督であれば、違つただろう』

しかし・・・

『提督、貴方はわかつているのですか?ご自身が一分間も待てない程焦つてらっしゃるといふことに』

『ちいつ!おっぱじまってやがったか!』

開けたままの回線ががなり立てている。状況は明らかに俺達側に良くない

ゴオオオオオオ!

9機の機影が黒に近い海の色の宙に浮かんでいる。寺津中將が要請したそれ、第四艦隊所属の着上陸支援用戦闘攻撃機宸雷だ、V/S TOL機能をもち、それなりの積載量を確保できるこの機体。鈴蘭の呼び名は製作した会社である九州・ベル飛行機の社章である鈴蘭に由来する

《最後の増槽を捨てたら、ラストスパートだ！きつちりデリバリ！すんぞてめえら！》今回のオーダーは特別オーダー、パイロンにはオイル満タンの増槽のみを積んで来た

《ちんたら飛ぶのも飽きましたしね！》

敵アイギス、或いはAEWやAWACSに引つ掛からぬよう、海面スレスレを速度を出さずゆっくりと飛んで来た。コースもハルマヘラ島の影に入るよう念入りに計算して、だ

だから、彼等は英蘭艦隊に突入する直前まで気が付かれなかった。

そして幸いなことに、彼等の傍にいるべき随伴の巡洋艦は、傍を外れていた

『こいつあ幸先の良い！前進部隊の連中、やるじゃねえか！これは負けてられねえなっ！』

機首を敵戦艦へと向ける。目指すは一箇所しかない

ギョオウ！

対空砲火を見計らって無理矢理ノズルを横にし、敵弾を回避する。

しかし2機の宸雷が、回避が遅れて爆散する。流石は戦艦の対空砲火、奇襲を受けて初っ端からこれかよ、だが！

『もう遅い！』

ミサイルなんて積んじやいない、代わりに積んでた燃料もすっからかん。機銃弾なんて重たいもんも積んじやあいない。だったらやることは一つしかない

《機体は所詮消耗品ってな！全機イジェクト！！！》  
射出装置のレバーを引く。ボルトが小爆発を起こして弾け飛び、キヤノピーが外れると同時に空中へ座席は導かれる。そして操縦者を失った宸雷は、若干機首を下げながら敵戦艦の艦橋へ

ドゴオツ！！！！

直前で更に2機食われたものの、各戦艦にそれぞれ突入する事に成功する。火災や爆発は生じない、生じるものが無いからだ。ただ、その質量は物を壊す事ができる

『へっへえ、してやったぜ！』

中指を立てて空中で笑う、これであいつらは遠距離砲戦能力を低下させた。それが意味する事は

ザバババババ！！！！

コンカラーらの周囲に、水柱が上がる

『待たせたな、前進部隊の諸君』

寺津はそういうと、不敵に微笑んだ。長門の最大戦速、28ノットで駆け抜けた甲斐があるというもの

『さて、どうでる英軍！』

海戦を続けるのか続けぬのか！

海戦は新たな局面を迎える。狩り立てる側から狩り立てられる側に、最後に立っているのは英蘭か、それとも日本か、ハルマヘラ島沖海戦は、そのクライマックスを迎えようとしていた

**E l e v e n t h   L i f t   ( 第 十 一 話 )   ( 後 書 き )**

ここまで読んだ人、さあご一緒に、オメエーガ１１イジエークト！

T w e l f t h      L i f t (第十二話) (前書き)

明確な決着がつくはずもない、敵もまた有能なのだから

T w e l f t h      L i f t (第十二話)

時は少し遡る

よいまちづき・C I C

よいまちづきは傷付いていた。至近弾による進水で足は遅くなり、何発かの砲弾が上部構造物を破壊して黒煙を発生させていたが、それでもまだ生きていた

『駆逐艦を蓬菜が上手く叩いてくれたから助かったが』

蓬菜、青葉級対空砲戦型軽巡の三女は、9700トンの戦隊に長砲身の6 i n単装砲を六門搭載した艦で、弾幕形成能力に優れる。今回はその火力を駆逐艦の阻止に使ってくれていたのだが

『蓬菜、沈みます!』

既に停止していた蓬菜のマークが消える。前進して来た敵巡洋艦戦隊の滅多撃ちにあい、やられてしまった。他の僚艦も、戦艦からの砲撃で2隻がこの世に無い

『来るぞ!』

そして、蓬菜を叩き潰した火力は振り分けられる。戦艦の暴力的な火力に晒されてなおかつ、だ

『洒落にならんぜ』

そんな砲雷長の呟きが現状を物語っている

『艦長!』

鷹野一曹が叫ぶ。対砲レーダーが捉えた軌跡、敵重巡に狙いをつけられたか！

『航海長！取り舵10！』

『ヨウソロー』

即座に航海長へと指示を出す。ああくそつ、敵はもう次をぶっ放しやがった。レーダースクリーンにいくつもの波紋が広がる

『航海長！舵加え10！』

艦橋につながっている受話器に叫ぶ。運動エネルギーを失わぬよう、ギリギリの所を通らなければならぬので修正も細かなものになっているが、むしろ大きく舵を切って仕切直しをしたほうがいいのか・

『くっ』

己の決断力の無さに呆れる。しかしそれでも艦長然としていなければならぬ。それが望まれているのだ

『っ・・・！』

鷹野一曹が真っ青になって振り返る。よいまちづきの進行方向に、よりもよって16in砲弾の落着予測点と交差していた

『艦長！』

『航海長！舵最大！』

永野も咄嗟に命令を下す。曲がった先には敵巡の8in砲弾の落着予測点があったが、気にしてなどいられなかった

故に、永野達への代価はすぐ支払われた

ズガガガガガッ！

『うおおっ!?!?』

『きゃあっ!』

突然の轟音と振動、CICに居た全員が姿勢を崩す。そして、無音と記憶の断絶、気付いた時には部屋の様相が様変わりしていた

『ぐっ……』

永野が身体を起こす。俺はいつ床に倒れたんだ?

『いったあ』

頭をさすりながら月海が起き上がる。よかった、無事か

『ひいつ?』

気が付いた鷹野が隣席を見て悲鳴をあげた。たたき付けられたのか、コンソールに突っ伏した顔から血溜まりが広がっていく

『復旧急げ!』

砲雷長はだらんと垂れた片腕を押さえながら指示を始める

『上がやられたのか?』

モニターの殆どが、データを受信出来ませんと小さく映してるだけになっている。使えているのはソナーと後部のイルミネーター関連の機器だけだ

『艦橋へあがる!』

永野は覚悟を決めた。ここに居てもすぐに情報は得られそうにない。直接舵をとらなければ

『私も付いていきます!』

月海が外に出るハッチに取り付くが

『熱っ!』

ハンドルが熱くて回せない

『馬鹿!やめんか!』

永野が突き飛ばすようにハッチに取り付いた

『お前の手は、マニピレーターを扱う大切な手だろうが!』  
繊細な感覚を指先で感じる必要がある

ジュウツ

『ぐうっ』

手の平が焼けるのを我慢しながらハッチを回す。クソツカが・・・！  
『待って！』

横から月海の手が永野の手に重ねられた

『これなら、熱くない！』

『・・・ああ！』

ハッチのハンドルが回りだす

『火が入ってくるかもしれない！他の者は何かの影へ！中尉もだ！』  
バックドラフトがあるかもしれない

『何を今更！開けます！』

『あ、おい！』

月海は永野の制止も聞かず、ハッチを引く

ゴウツ

幸いな事に、空気がいくらか吸い出された以外は何もおきなかった  
『ぐうっ』

ビリッとハッチから永野が焼き付いた手の皮を無理矢理引きはがす。  
血だらけだ

『待って！』

そのままCICから出ていこうとする永野を、鷹野が呼び止める

『せめてこれを』

ハンカチで手を覆う

『ああ、この前の分も返してなかったな』

『かまいません、持っていて下さい』

よし、しぱり終わった

『ありがとう、大事に使うよ』

急がねば・・・！

『・・・』

気が付けば、月海が何故か不機嫌そうにしている。いや、気のせいか

『こ、これは！』

通路に出て唾然とする。天井の破孔から空が見えた。つまり、これより上は相当な被害を・・・

何とか使えるタラップを見つけたしてあがろうとしながら、損害を確認する。畜生、マストが根元から折れて無くなっている

『航海長！』

そして驚いた事に、未だ艦橋は機能していた。いや、機能を終えようとしていた

『艦長、僭越ながら艦の速度を落とさせていただきました』

何事もなかったかにそういう航海長だが、脇腹がどす黒く染まっている。もう、助かるまい

『敵艦は！』

心中で何度も謝りながら、一番聞かねばならないことを聞く

『ご覧下さい艦長』

普段笑わない航海長が、そういつて両手を広げ、外を指す

『うそ・・・』

月海が呟くのも無理は無い

戦局はがらりと変わっていた

『主隊が来たのです。我々を救いに』

しかも、それでも優勢な敵戦艦からの遠距離砲撃すら途絶えた。何故かはわからないが、何かをしたのだらう

『我々は勝利しました。だというのに！』

航海長はがくりと膝をつき倒れた

『航海長！』

永野が駆け寄るが、航海長は既に事切れていた。気力だけで立っていたのだ

『悔しい、悔しいよな』

『・・・永』

月海の言葉を永野は手で遮る

『悔恨も懺悔も、全てが終わってからだ』

今はまだ、立ち向かって行かなければならない。この海戦を生き延びる為に

コンカラー

『何故だ！何故こうも！』

してやられた。何処から現れたのか、敵のV/S T O L機がトップへ体当たりをしてくるとは

『中将！ご無事ですか！？』

先程下からせた幕僚が駆け込んで来た

『君は……』

『敵艦へ距離を詰めるべきと具申いたします!』

フルトナーは口角を上げた。笑ったのだ。確かに今の戦況であれば、艦本来の戦力で優る我が艦隊が前に出れば勝利を掴む事は可能である。

『見損なうな!このフルトナーが、自棄の突撃を行うと思うてか!』

確かに勝てる。勝つ事は間違いない。だが、相手は我々の艦と引き換えに出来る相手か?否!断じて否である!

『この海域より撤退を行う!巡洋艦戦隊は艦の保全に努めよ!』

『英断です』

ふん、ぬけぬけと言いおる。敢えて有り得ないほどの愚策を提案して、そう仕向けたのは貴様達であろうが

『これだからブリテンは』

フルトナーはそういつて苦笑した。しかし、敗戦の責任は取らねばなるまい

タンツ!

英蘭艦隊が戦闘海域を抜けた事を確認したフルトナーは長官公室へ戻り、敗戦の責任の所在は自分と記した後、乾いた銃声を残して自決した。それが、彼なりの責任の取り方だったのである。

長門、CIC

寺津は指揮官席に腕組みをし、目をつむって体重を預ける

『良い引き際だ』

部隊を前進させるタイミングさえ見誤らなければ、我々は相当な損害を被っていただろう

『長官！今こそ追撃を！』

参謀が意気込んで進言する

『無駄だ、敵はまだ戦闘力を残して後退した。いくらかは砲戦能力も回復しよう』

我々は敵に劣っている。それを忘れてはならない。『現状の戦力と戦果では、テイモール島への上陸は実行不可能である。よって、我が艦隊は本作戦の中止を宣言する』

寺津はそういつて頭を下げた

『みな、辛い戦いご苦労であった。溺者救出の後、佐世保へ帰還する』

こうしてハルマヘラ島沖海戦は、ひとまず幕を閉じた。次の日本の、あるいはイギリスの一手はどこになるのか・・・それは誰も知らない

Thirteenth Lift (第13話) (前書き)

産めよ増やせよ地に満てよ

Thirteenth Lift (第13話)

12月8日・長崎

よいまちづきは傷付いた身体をドックに入れ、その傷を癒していた。長崎に入ったのは佐世保が第三艦隊の他の艦で埋まったからである（大まかに呉と大神は第一艦隊、舞鶴は第四艦隊、第二艦隊が横須賀と神戸、第六艦隊が大湊を管轄分けて使っている）

『ふう』

月海は海沿いの喫茶店でコーヒーを飲んでいた。ちなみに、アフリカの解放がろくになされていないので、キリマンジャロが一番高いし紅茶も割高である。今の所敵を飲む、という意味で、高くても紅茶を頼む人が結構いるそうである

『なんでこうなっちゃうかなあ・・・』

ため息しか出ない。よいまちづきは長崎にドック入りした。そして長崎は海軍港区では無く商用港であるため、余程の事でない限り撮影等を禁止にすることが難しい

『あらー、海軍さんは大丈夫なのかしら？』

『すごいわよねえ、ぽつきりよぽつきり』

今入ってきた主婦の二人組がよいまちづきの入ったドックを見ながらそんな会話をしている。そう、よいまちづきの傷付いた姿は全国にテレビ報道された

『勝つたらしいけど、あれじゃかなり死んでるわよねえ』

『こわいわねー、何処まで戦うのかしら？』

終わりが見えない戦いが人心を不安にさせる。それは私も変わらな  
いんだけど

『あんなの見ちゃったから私、昨日の夜夫におねだりしちゃったわ』

『あらあら、ごちそうさま』  
思わずコーヒを吹き出しそうになるのを我慢して飲み干す  
『でも、兵隊さん達も発散しなきゃやってられないでしょうねえ、  
うふふ』

『こちら、んー。でも死んじやったら終わりですものねえ』  
死んだら終わり。そう、確かにそうだ、だったら・・・私は

### 首相官邸

『第三艦隊は一連の海戦でかなりの損害を受けたと聞きます』

『は、我が海軍の艦艇だけでも巡洋艦1隻とアイギス艦5隻を失つております』

大日本帝國の議会の長である首相の西田は、秘書官に椅子に座りながら聞いた。彼は高官でありながら、一切ソファーには座らない事で有名である

『海軍大臣から聞いた話に乗ったのが不思議なのでしょう？』

秘書は質問しようと思っていた事を先に言われてたじろぐ

『はい、閣下は私が言うのも違う気がいたしますが、政治家としても人間としても清廉な方です』

戦時内閣設立という理由で倒閣されるとしても、軍の言う赤道直下の国々の支援を行わないための戦争など

『彼等の言も正しくはある。数億の民草の食いぶち、養いきれるものでは無い。連合国側も同じくな』

西田は瞑目して言う

『君は、この国の出生率を知っていますか』

『確か、1・2人から低下中と聞き及んでいます』

頷く西田

『先進国とされる国に巣くう避けられぬ病苦です。人が安楽に生きすぎた罰とでもいうべきものなのかもしれません。ですが、戦いの風はその安楽を脅かす事でしょう』

傷がついた柿木が、その年の秋に沢山の実を実らせるように

『人生八十年。生まれた子らは、この国の百年を支えてくれるであろう。始まる事が決まっておる戦火で、軍が民草を刈り取るならば、我々は種を撒かねばならない』

その仕事だけは、欲の強いものがしてはならない。民は知らずとも実状を感じ取る、それは出生率を間違いなく下げる要因となるであろう

『故に御自身が汚れなさると?』

『それが政治家としての本望でしょう』

国家の為に身を尽くす。実に名誉ではないですか!と、西田は明瞭快活に笑う

『閣下・・・』

今この時期に西田という首相を持たせた事は、日本にとって幸せな事なのかもしれない

スペイン・総統府

『あら残念』

裸シャツのまま、ファン・幽花は報告書を読みながら呟いた

『ありがと、下がりなさい』

報告書には日本のティモール島攻略作戦が失敗に終わったと言う事

が書いてあった。もう少しで隣の国がもがき苦しむ姿が見れたのに、  
残念残念

『うりうり』

仕方ないのでベッドで干からびてる夫のリグルを指でぐりぐり弄る。  
本来ならオランダ領西ティモールが落とされて、戦争難民が東ティ  
モールへなだれ込んでいたからだ

日本はティモールの民衆をオランダから解放するつもりも、維持の  
為に戦力を配置するつもりも無かった。全ては中立国であるポルト  
ガルに押し付ける算段であったのだ。そのためにはポルトガルの中  
立がなくてはならなかった、そのために彼等はポルトガルに存在を  
許した。今後もそうだろう

『ふふふ、好きよ』

そういうのは大好き、いじめていじめて、いじめぬかなくちゃ

『だーいすき』

再び幽花は捕食を始めた。大規模な世界状況の変革はありえない、  
これは壮大な戦争ごっこなのだから。だったら楽しみましょ？

愉快的な人間の自殺劇を

**T h i r t e e n t h**

**L i f t ( 第 1 3 話 ) ( 後 書 き )**

感想お待ちしております

**F o u r t e e n t h L i f t (第14話) (前書き)**

損害の埋め合わせは、必ずしも従前では無い

Fourteenth Lift (第14話)

長崎造船所

『そうですか、よいまちづきはアイギスとしての復帰は出来ませんか』

造船技官の話に、永野は唸った。どっかの与太話のように、修理の度に魔改造なんてのは夢物語でしかないか

『水鏡機構を建造中の艦から引きはがす余裕がありませんでして。

代わりにとっては何んですが、建艦予定でした次期汎用駆逐艦の装備一式を利用して修理を行います』

『月の名が泣くなあ』

広域の対空戦闘は不可能になる。対空艦の名前として誉れ高い月の名がかわいそうだ

『それでもたちかぜ並には戦えますよ？』

『でなければ修理の意味が無い』

現在艦隊で運用している対空艦としての最低ラインにとどかなければ意味が無い。汎用駆逐艦であるはつゆき級の役割を、この艦がやるには高コスト過ぎる

『だが、アイギスを抜くとなると、艦のバランスが悪くならないかな？』

アイギス艦が巨大な艦橋を持つのは、大型のレーダーを組み込んでいるからだ。それが無くなるとバランスにも影響が出るかもしれないという疑問は正しい

『ああ、そのことでしたら。修理にあたりヘリ搭載能力を撤去して水中戦闘機を搭載する予定ですから』

『そりゃあどういふ事です？第六艦隊の管轄でしょう？海燕は』

つか、そんなもん載せたらDDGじゃなくてDDIになっちまうぜ  
『そこまではちよつと・・・』

造船技官の知る範囲では無い

『ああいや、すまない』

これは、あれか？特殊任務でも与えるつもりであろうか

『だが、ヘリと同じく載せられるのは1機か2機だろうか？』

部隊編成が小さすぎるし、ヘリのように行動範囲が広いわけでもない。利点がなさすぎる

『他の艦に改装予定は？』

『いえ、ありません』

そうだろう。こんな改装誰が得をするのか

『その件に関しては、わしから話そう』

ノックもせずに入って来た人物、それは

『寺津中将！？』

すぐに立ち上がって敬礼する。技官さんも一礼して部屋から退出する

『先ずは礼を言いたい。よくぞ生き残ってくれた』

深々と寺津中将は頭を下げるたかが中佐相手にだ、こっちが恐縮する

『いえ、今すぐにお茶を』

『構わん、座りたまえ』

寺津中将に促されて座ると、彼は話し始めた

『バダウ、イアでの一件、先のハルマヘラでの一件、艦長着任早々  
でありながら、過酷な任務ご苦労であった』

十死に一生をよくぞ、生き残ってくれた

『いえ、先任の乗員達が上手くしていただいただけです。特に、戦  
死なされた航海長には・・・』

沈黙が降りる

『・・・白根でも辛かったであろう』

寺津は瞑目した。この若者は死に直面しすぎておる。だが・・・

『ありがとうございます』

寺津は彼の瞳に光るものを見たが、言及しなかった

『して、今回の改装だが、君はこの戦争の終わりをどう考えるね』  
戦争の終わり、終わりを考えるには始まりを振り返らなければなら  
ない。今回の戦争は確か・・・

『我々のSSTOが連合側の衛星を攻撃した事が原因、とされてお  
りました。遠因がピナトウボ火山の噴火にあると言つのもあるでし  
ょうが』

寺津は頷く

『我々はそれに反論するでなく、戦争を行っている。これではまる  
で肯定しているようではないかね？』

マスコミや海軍発表は否定しているがね

『まさか！』

事実なのですか！？と言ひ募ろうとする永野を寺津は手で制する

『君ははまだ君の艦に乗っている彼女を見て、そんな事に加担した  
と思つかね。彼女はマニユピレーターだった。彼女がそれに気付か  
ぬはずがない』

『い、いえ・・・ありえませんが』

そんな隠し事が出来る奴じゃない。それだけは信用できると思う・・・  
・勝手な妄想でしかないかもしれないが

『では、貴官の艦がどういった役目を果たすべきか、自ずと知れて  
こよう』

寺津は微笑み、永野は沈思して解答を模索する。簡単な帰結だ

『本艦はSSTOの墜落地点に赴いた事のある艦であり、現場海域  
にどの艦よりも精通している。そしてDSRVである海燕で海中の  
SSTOからデータを回収する。それにはSSTOと海燕に精通し  
ている月海が必要になる。そういう事ですね！』

頷く寺津。そしてそれにどんな困難が伴うかも、それに気付けばす  
ぐにたどり着く

『敵艦隊の排除と、データの信憑性が問題になりますか・・・』

敵は戦艦10隻以下多数を擁する東洋艦隊、それを超甲巡を含めて  
たった4隻の戦艦しかもたない第三艦隊が突破し、インド洋の該当

海域に到達しなければならぬ

それから、データを得たとしても、誰がそれを信じるというのか。ゼロに近い確率だが、もし東洋艦隊に勝って該当海域に到達し、宇宙での工作が事実でないと訴えたとして、捏造というのは簡単であるし、負けたままで戦いを止められるわけがない。

あるいは、と我々が負けて故意でないことを主張したところで、受け入れるかも怪しい、なにせ相手は勝っているのだ。それに、負けて手を挙げるというのは、相手にフリーハンドを与えるに等しい

『今は、戦力が足りぬな』

そういつて寺津は笑った

『だが、忘れてもらっては困るな。我が国にも同盟国が存在する事を』

舞台はヨーロッパ、地中海へと移ろいゆく

**Fifteenth Lift (第15話) (前書き)**

話に苛立ちを覚えるならそれは正しい、いかに悪徳の限りを尽くして  
て權益を守るのが国家のありようなのだから

Fifteenth Lift (第15話)

2002年1月1日・イタリア、ウエネチア

『アウグーリオ・ボナノ!』

『アウグーリオ・ボナノ!』

と、サンマルコ広場で年賀の祝祭が行われているなか、王立イタリア海軍第二艦隊司令、グランチェスカ大將は入り豆を口一杯にほうばった

『市井の人間はいいねえ』

飲み込んで呟く

『ちゃんと手を拭いてから書類を扱ってくださいね』

参謀長のアルベルトが書類をもって入って来た

『つまらん事を言うな、アル』

豆から手を放し、机におきっぱになっていた紙飛行機をアルに向かって投げ飛ばした

『おっとつと、これは?』

両手が書類で塞がっているので、身体で受け止めた

『日本からのお年玉だ』

アルの表情が変わった

『きましたか』

コルダ・ハンニバルが避けられたならば、我々が動く事で世界のフランスは大きく変わる

連合軍の持つ戦艦はイギリス10隻、フランスが3隻、そしてオランダが1隻の14隻、そしてこちら側、枢軸は日本が16隻、我が国が4隻の20隻。数値的にこちらが勝ってはいるが、核砲戦での危険性から戦力を一気には絶対に出さない日本のドクトリンと、我

が国と連携をとるには敵が完全に把握しているインド洋を踏破しなければならぬ位置関係が均衡をもたらししていた

『いいじゃねえか、俺達ができるならな』

本気でやる気なら日本も俺達のトップも、フランス海軍の方を潰すように仕向けるはずだ。そっちはナポリの第一艦隊が受け持ちだ

『といつても、俺のセレナにブリテンの三人娘を殺させたかねえがな』

ラ・セレネツシモ、地中海の女王という敬称を付けられるのはあの一隻しかない

『しかし、ヴェニト・ムツソリーニが戦いませんと』

連合軍側からはイタリアンヤマトと呼ばれる彼女の名前を、アルは告げる

『それも理解している。インペロ、いや、リットリオ級はいい女だが、お互い同時期の戦艦で2対3となると、いささか分が悪い』

グランチェス力は足を机に投げ出して椅子に寄り掛かる

『それから、うちのセレナだったらキングジョージ五世級の2隻を受け持つのは何とか可能という事もな。実際うちのセレナはスエズ

動乱の時に二人やつちまってる』

グランチェス力は瞑目した

『だがよ、敵にとっちゃうちのセレナは仇だ』

長女と次女のな。その気迫は並じゃねえ、刺し違え覚悟でやってくる

『だからといつてやられるつもりもありませんでしょう？司令は』  
アルは笑う

『当たり前だ、自分の女を死なせる馬鹿がどこにいるかよ。でもよ、傷だらけのセレナやインペロの前で、先に逝った姉さん達に詫びながら死なせるのは好みじゃねえ』

そりゃあ戦乙女の宿命といつたらそれまでだが

『いかに敵をいなしつつ戦うか・・・』

大変だなあ、これは

『日本側が納得するような損害を与えて、ですね』

『そんなとこだ』

二人して笑う、日本もこの世界の形が変わることは望んじやいねえ、今求められてるのは、先のハルマヘラ沖海戦で損傷した4戦艦の修復が終わる前に、こちらの戦線から3戦艦を病院送りにすること。そうなれば敵は戦力を分けざるを得なくなる。そのうえでなにかやらかすつもりなんだろう。それが何かはわからないが

『なあアルよ、面白い事になったもんだなあ』

このイタリアがどんな行動をとるかで、世界はいくらでも変えられる。日本や英国じゃなくて俺達だ。実に愉快痛快、ま、だからといって天秤を動かそうなんて考えないがな。面倒だし

雪解けはぬかるみを産む。ぬかるみを望む者は、少なくとも列強には誰もいなかった。誰が好き好んで泥に塗れようというのか

S i x t e e n t h L i f t (第16話) (前書き)

かの島は、なぜこつも戦乱に彩られねばならないのか

## Sixteenth Lift (第16話)

2002年1月17日・マタパン岬沖

白波を蹴立てて、地中海をイタリア海軍第二艦隊は進む

『左舷、ギリシヤ海軍駆逐艦!』

『ギリシヤ海軍の駆逐艦に伝えよ。見送りご苦労、誓って戦果を揚げん。帰航の際は美女をよろしく頼む、とな』

グランチェスカはそういつて笑う。ギリシヤはドイツの敗戦処理で戦後ずっとイギリス側傀儡政権(連合への参加はしていない)のままであるから、物凄い挑発である。といつても、かつてのゴトラントよろしく付いてくるギリシヤ海軍の駆逐艦もたいしたものだ

『しかし、出てきますかね?』

アルが疑問を呈する。ギリシヤに近づく形での艦隊運動、陽動で助攻準備を行ったトルコ(戦後に枢軸に流れた)と、そこそこの情報は与えてるが

『どうか。ま、出てこないならコルクで栓をしてやるだけさ』

今艦隊は、ギリシヤ上陸のカモフラージュでいくらかの輸送船を引き連れている。それっぽく見えるように、退役船ながら一時は一世を風靡した大型客船なんかが主である、レックス号とかがそれだ

『まあ確かに、これを許すほど英海軍は積極性に欠ける海軍ではないですが』

船を沈没させてのスエズ運河封鎖。これを為された場合、アジアに配備されている艦艇は希望峰経由で本国に戻らざるをえなくなる。

艦隊集合が英仏両地中海艦隊よりは楽な俺達が、どちらかを撃破して大西洋に出してしまったならば、彼等は本土を砲撃される危険に晒される。イギリス本土が砲撃されるとなると、第二次世界大戦中に

フランス沿岸から列車砲を撃ち込まれて以来か

しかも、今は昔と違って、弾頭は通常に非ず、という状況も考えられる。悪夢以外のなんでもない

『あまりにもあからさますぎやしませんかね』

アルの言葉にグランチェス力は不敵な笑いをさらに大きくした

『だからいいんじゃないか。ここまでしたからには、やる気なんだと相手も思うさ』

俺達は第二次世界大戦でも、スエズ動乱でも、海戦には勝ってきた。ここまで馬鹿にした行動は、驕慢と呼ばれても仕方があるまい

『イギリス紳士って奴は見栄はつてなんぼだ、意地も張れない栄華なんぞ糞食らえな人種だ。実に共感出来る・・・ホントだぞ？』

だったらよ、一発殴ってやんなきゃ気が済まんよな。横合いからおもいつきり

『おい、あつきゅんからの直掩シフトを密に、ナポリの空軍にも増援を要請しろ。給油機つきでな』

『長官、いい加減艦をあだ名で呼ぶのは・・・』

アルは肩を竦めた。この人はまったく

『いえ、わかりました。すぐに上げさせましょう』

『頼むよ。参謀が有能で大助かりだ、俺がサボれる』

長官がこんな調子なので、イタリア艦隊司令部に戦闘前の緊張感なぞ一つもなかった

キイイイイン！

後方のアクイラから麗風 レッシィナマリネ R e f i n e d ・ R が飛び立つ。日本の川西・碎風（トムキャット相当）が高コスト過ぎて採用出来ず、陸上

機だった川崎・麗風（イーグル相当）を艦上機として改修した機体だ。戦闘能力に申し分はない、碎風と較べて遠距離阻止能力が多少劣るのが玉にキズだが、それは贅沢が過ぎるか

『楽なままに終わればいいんだがなあ』

しかしそれがはかない願いであることを、グランチエスカは誰よりも理解していた

同刻、アレキサンドリア・地中海艦隊司令部

<不適切>

スエズ動乱以来、イギリス地中海艦隊を陰から指す言葉として、非公式にこの単語が使われる

『結構、下がりたまえ』

第二次世界大戦のマレッティモ島沖海戦・スエズ動乱でのロードス島沖海戦、世界第一位の海軍であったはずの我がロイヤルネイビーが、圧倒的差をつけて五位だったはずのイタリア海軍に敗北した。

戦争そのものにはドイツ降伏、エジプト独立阻止と勝利を得ていたにもかかわらずの敗北は、なおさら地中海艦隊への悪印象を強めた。だからといって<不適切>であることに、地中海艦隊の将兵が納得していた訳では無い

『提督』

『提督！』

立ち上がって呼び掛ける幕僚達に、提督と呼ばれた男は嘆息した

『みなまで言うな。我が艦隊はイタリア艦隊迎撃の為、出撃する』  
確かにこれは挑発なのだろう、確かにこれは畏なのだろう。だが・  
・  
『イタリア海軍はやがて知るだろう、我々の逆鱗に触れてしまった  
事を』

シンク・ザ・ヴェニトムツソリーニ

第二次ロードス島沖海戦の幕が、今正に開かれようとしていた

Seventeenth Lift (第17話) (前書き)

何度でも言おう、敵は強いのだ。敵は強い。楽になぞ勝たせてもら  
えるものか

Seventeenth Lift (第17話)

2002年1月19日・ロードス島沖

『気に入らねえな』

グランチエスカはリーダー画面を眺めながら呟いた。敵はギリシヤ沖から航空攻撃など、俺たちを消耗させるべく動くのがグランチエスカらの予想であった。それが無い

『今更俺たちを舐めるような状況じゃあるまい。何か変だ』

昼間砲戦を敵が選択したのも同じく異常だ。いくらリーダーが発達したとはいえ、単艦の攻撃力では劣る彼女らが採るべきは接近戦。そのためには夜の闇を纏うのが定法

『アル、何かがおかしいぞ。何かをライミーは企んでやがる。だが、何かかわからん!』

いやいや、そういうのを明確に言及しちやいかんでしょ、艦隊司令が『そりゃあ企みましょうよ』

アルは肩をすくめて苦笑する。企んで当然、英国人だもの

『しかし、我々はニュータイプでもエスパーでもありません』

『・・・いまさら、だな』

ちと、気が昂ぶり過ぎているようだ。イタリアでは大規模な海戦は四半世紀以上もの間行われていない。考えてみれば初陣も同じか・

『やってみるしか無い』

グランチエスカに頷くアル。もうここまで来たらやるしかない

『敵艦隊との距離は65キロほどだったな』

具体的な戦術案を提示する頃合いか。こちらの18in砲が最大射程で60キロほど、その八割が有効砲戦距離と考えれば、まだまだ

時間はある

『敵は同航戦を選択するようですね、現在回頭中です』

まあ、スエズ運河への突入阻止が目的だから食い下がらなきゃならないわけだ、当然

『俺ならT字を選択するがな』

グランチェスカは吐き捨てる。それなら接近と投射弾量、どちらもが果たせるが

『好都合でしょう。敵も戦艦を失うリスクは犯せないという現実の現れではないでしょうか？』

ラッキーヒットでもでない限りは

『・・・』

グランチェスカはどうしても引つ掛かった。あまりにもオーソドックス過ぎる。これではまるで、敵はこちらの艦隊よりも砲力に優るかのような

『っ！？対砲レーダーに感！敵艦発砲！』

ムッソリーニのCICがその報告に凍り付いた

デューク・オブ・ヨークCIC

もし、現在英地中海艦隊が採っている戦術がオーソドックスであるかどうかを問われれば、彼はこう答えたであろう。『イエス』と  
そして、自軍の砲力が敵軍より優っているかと問われれば、彼はまたこう答えるだろう。『イエス』と

『さぞ面食らつておるでしょうな、イタリアの連中』  
参謀が楽しげに笑う

『14 in 砲艦で18 in 砲艦に勝とうなぞ、並大抵の事では出きんからな』

そう、並大抵の事はしていない。まず、陣形。お互いの艦が300メートルも離れていない。核砲戦が現実に行われかねない今となつては、あり得ない程の近距離である。これだとそれが使われた場合、確実に一隻はやられてしまう

だが、地中海を我らの海と自称する彼の国が、そうそう核に手をつけることは考えにくかつた。ならば無視してしまえばいいのだ

『しかし、こちらが14 in 滑空砲になっていたのに気付かれて無いようだったのは幸いだった』

対策を練られては根底から作戦計画が瓦解する

『しかし、提督のこの発想はどこから』

ふん、と提督と呼ばれる彼は気恥ずかしそうに微笑した

『古くは今はなき故国の火箭、先の大戦ではソ連に使用実績がある。それほど特筆したアイデアではない・・・APSFDSもな』

そう、イタリアンヤマトと戦うにあたって絶対的に足りないのは射程と貫通能力。APSFDSならその双方を満たす能力を発揮できる、勿論デメリットも大きい、まず風に弱い。有翼なのだから当然だ、遠距離での散布界は絶望的なほど広い、それを補うために陣形を核砲弾を敢えて無視して密集したものを採用、一艦のデータを利用しての統制砲撃を行うことで投射量の方を拡充させたのだ

それから、滑空砲化したがために近距離はともかく、中距離での通常砲戦能力は相当落ちたし、APSFDS自体の爆発威力は6 in 砲弾並みに低下している。が、装甲貫通能力は期待していいため目をつぶった。なにもかも充実させることは出来ない。相手は腐つて

もヤマトクラスなのだ。リスクもなしに戦えるわけが無い

『流星は紅提督ですな』

アドミラル・チャイナの名前は伊達ではないということだろう。本人はスエズ運河という門のただの門番さ、としか言わないけれども

『我々は採れるだけのカードを集めて並べた』

後はなるようにしかならない

『さあ、存分に剣戈を交えようじゃないか。イタリア海軍』

KGV級三姉妹はロードスの海に吠える。その咆哮は鮮烈なるレイピアの突きを繰り出す女騎士に似て、地中海を熱く切り裂いた

Seventeenth Lift (第17話) (後書き)

感想評価をお待ちしております。やっとまともに戦艦砲戦はじめれた、かな？

**E i g h t e e n t h   L i f t   ( 第 1 8 話 )   ( 前 書 き )**

不器用なのだ、どいつもこいつも

## Eighteenth Lift (第18話)

ムツソリーニ CIC

『APSFDS!』

対砲レーダーが示すデータを見て、グランチエスカは合点がいった。確かに、確かにこれなら戦える。

『そんなバカな事が・・・戦艦の主砲を滑空砲にするなんて』

アルが驚きのあまり思考停止に陥っている

『そりゃ企むさ！英国人だものな！だが、これで敵の意図と弱点もはつきりした。そうだなアルベルト参謀長!』

『は、はっ!』

わざと出した大声に、艦内の雰囲気落ち着く

『敵はろくに弾着観測ができてねえ！たりめえだ、装弾筒で中の爆薬なんて過少で水柱が小さい上に、狙って撃っても翼で散布界は最悪だからな!』

そのためにこちらに送る弾数を増やしてるのだろう。いい手だよまったく

『しかも命中したって、威力は大したことはねえ代物だ』

装甲的にはまずいのだろうし、命中したらなんらかの損害は受ける。もしかしたら主砲の運用に支障が出るかもしれない、敵はその可能性にかけた。たいした相手だよまったく

『それで参謀、俺達はどうすれば良い』

アルは気を取り直してその頭脳を働かせている。うん、それでいい。通常砲戦で結構です。敵は圧倒的な投射量での命中を狙っております。仮に一発が命中しましたとしても、修正が行われている訳ではありませんので、次の命中には可能性の問題として時間がかかると

思われます』

アルは自分の言葉を確認するように頷いて続ける

『修正されていずれ捉えられる砲撃と、確立の低い博打のような砲撃、どちらがよりプレスを与えられるかは明らかです！そして本艦は』

『18 in 砲艦』

アルの言葉尻を捉えて笑う。敵を強かに打ち据え、あるいは裁断する重鉄扇のようなその威力をあちらが受け続ける事は不可能だ。正々堂々と正面から打ち砕く戦こそ、セレナには相応しい

『女王は毅然と、そして気高くあらねば、な』

それでこそ地中海の女王に相応しい

『ともかく、まずは接近だ！面舵取れ！最大戦速！』

『了解！面舵、最大戦速！』

しばらくすると艦がググウと傾くのが感じられた

『砲撃は少し早いが五万から始める、日頃の鍛練は可愛い子ちゃんとの夜の為だけでない事を証明してみせろ！』

『なに、上手く当てたら女の子に上陸して自慢できます。砲術の連中はやってくれるでしょう』

そうでなくてもイタリア海軍の腕っこきを集めている

ガキユンツ！

唐突に異音が響いた

『何事か！』

『被害報告！煙突に被弾！貫通されました！弾体は海へ！』

おいおい、いくら煙突とはいえ、貫通して突き抜けるなんてどれだ

けの貫通力だよ

『インペロと随伴艦艇は本艦より離脱、さらに接近させます!』  
アルが進言する。なるほど、敵の三姉妹はこの艦に砲撃を集中させてこそ意味がある戦い方をしている。敵の随伴艦艇と戦うにあたって、戦艦を含むこちらが有利だ

『よし、やれ!』

あとは俺達が勝てば良い。なんと単純、実に世は事もなし

『長官、そろそろ五万メートルを切ります!』

『さあ諸君、始めようか!』

CICの全員が頷いた。

1344、ヴェニト・ムツソリーニ発砲

デューク・オブ・ヨークCIC

『敵艦隊分離!本艦隊に向かってきます!』

『随伴艦艇に阻止を命じます』

ああ、敵も分かっている。こちらが攻撃目標を変える事が難しい事を

『紅提督、こちらの随伴艦艇では・・・砲撃目標を変えられては』

『それはならんぞ』

例え今、突入してきている部隊を砲撃し撃破したとして、それにかかる時間をあの艦に与えて我々が無事でいられるか・・・ありえない。そんな相手ではない

『このまま砲撃を続けよ！』

背水の陣だ。ここで>あの艦<に負けてしまったならば、一体なんの為の雌伏を地中海艦隊の将兵は強いられてきたというのか！

『巡洋艦戦隊より入電！お前の指揮はつまらん。これより我らは独自行動をとる！て、提督・・・』

『駆逐艦戦隊より入電！勝利こそ我がオーダー、巡洋艦戦隊に続行する。願わくば戦艦部隊が義務を果さん事を、以上です！』

紅は大きく目を見開き、そして瞑目した

『みんな、すまん・・・すまん』

そう呟いたあと、紅は叫ぶように命令した

『射撃を続行せよ！発射速度を下げるな！』

海戦は加速度を増して展開していく。勝利という名の天秤は、果たしてどちらに傾くのか・・・

Nineteenth Lift (第19話) (前書き)

事象は波及する。当事者達が剣戈を交えているその時すらも・・・

## Nineteenth Lift (第19話)

アルゼンチン・大統領官邸

『大統領閣下！』  
『始まったかね』

イタリアとイギリスが地中海で激突することが不可避となった情報は、主要国以外のどこよりも早く、アルゼンチンが把握していた  
『・・・』

秘書がさがったあと、黙ったままの腹心に大統領は声をかけた

『案ずる必要はない、気付いた時にはブラジル以外の南米諸国は我々を頭に英国に宣戦布告する』

といっても石油利権的にベネズエラだけは中立であるが、ブラジルが潰れた後はそうもいつてられなくなるだろう

『米国も東海岸の英国資本、そしてメキシコへの圧力をかけたがっている。結果的に黙認か、我々の側への加担すら考えられる』

終戦時の株価暴落などで内戦状態になったアメリカは、テキサスの自由貿易市場化（体の良いメキシコへの身売りである）東海岸の諸財産の英国資本へ売却などしてようやく形を保っていた

『未回収のアメリカ、ですか』  
なんとか復興がなされてきたアメリカで、かつての権益を取り戻そうという運動である

『これまでのネイバルプレジデントと違って、新任の大統領はわかりやすい人物だしな』

ネイバルプレジデント、終戦後分離衰退状態のアメリカを復興させた海軍提督出身の大統領の事を言う、ブル・ハルゼー、JFK、ロナルド・レーガン、ジョニー・ガーランド、ジョージ・ブッシュ、

等がそれだ

「かつての大統領がしなかつた事をすると公約に掲げて勝つた人物だ。ここを好機とせずになんとする」

「いい加減第三世界としてアメリカ大陸が指導力を発揮しても良からうという意見は私も同意見だ」

「そして今、大西洋に英海軍の戦艦は存在しない」

インド洋に過集中をしてしまった。本来本土にあるべき獅子王姉妹を投入して戦線を優位に進めようと企図し、それに失敗した。その上、結果はどうなるかわからないが、地中海でも衝突が必至となった。ただでは済むまい

「ブラジルのミナス・ジユライス級二隻、我が国のリヴァダヴィア級二隻、そしてチリのアルミランテ・ラトールは米国がかつて叩き売ったサウスダゴタ級未成艦の集まりだ。ならば隻数が多いほうが勝つ。ましてや米海軍が牽制にだけでも加われれば」

負けることはあり得ない。子供の算術のような事を言う大統領に、腹心は眉をひそめた

「獅子王姉妹が戻ってきたらどうするのです。この地域の戦艦はほとんど改装を行っておりません。手も無くひねられますが」

「東南アジアを失って、か？地中海も放っておいてよいのか？選択としてありえん手だ」

大統領は多少声を荒げて反論した。

「ブラジルも状況次第ではなびこつ、そうならば獅子王姉妹とてやすやすとは手出し出来ん」

今が機なのだ、南米が世界の主役へと躍り出る機会は今しかない！  
「そもそも君は良いのか！彼らが最初の決戦場として勝手に我々の海域を指定して核のパイ投げを行うことを知らぬわけではあるまい」

「ニュークリアガーデンなどこじやれたあだ名なんぞつけて、そりゃ奴らは良かるう！遠く離れた北半球の島国だ。だが、我々は違う

！そこは俺達の庭で、俺達の家だ！誰がそんな所で核のパイ投げをやられて喜ぶものか！

『・・・はい』

それはこの国で物が見える人間であれば誰しもいくらかは持つ感情だ、否定は出来ない

『・・・少なくとも日本とは敵対せん。安心しろ』

通常戦力から見るかぎり、投入戦力の逐次投入のきらいはあるものの負けは考えられない。勝つほうに付く、何も間違えてなどいない  
『全てはUSN（ユナイテッドステイツオブニューコンティネンタル・新大陸連合国）設立の為に』

賽は投げられ、戦争の様相は変わる。それが導く果てに静かな海はあるのだろうか・・・

Nineteenth Lift (第19話) (後書き)

チョコバーは出てこないのでも悪しからず。しかしあの世界の日本が  
OCUに居る理由がさっぱりわからない・・・

Twentyth Lift (第二十話)

ムッソリーニCIC

『第七斉射近弾！敵艦を挟叉しました！』

待ちに待った報告が観測機からもたらされる。先程の被弾からそこそこ時間がたっているが、命中弾は貰っていない。やっとアドバンテージを握り返せるか

『交互撃ち方始め！』

グランチェスカは叫ぶ。敵はかなり接近した陣形をとっている、上手くいけば散布界にいる二艦同時に命中弾を送り込む事が可能かもしれない

『インペロの方はどうか！』

敵の随伴艦艇を叩くべく前に出ている

『戦場での戦艦は、インペロの名が示すように帝王が如く、です』  
15in砲だけでなく、副砲や高角砲すら雨あられと二次大戦後にかなり精度の高まったそれが降り掛かるのだ。あれほど魚雷にこだわっていた日本が、駆逐艦による突撃を諦めた。諦めざるをえなくなった理由がよくわかる・・・自殺行為だ、戦艦への突撃なんて。せめて重巡以上じゃないとお話にならない

ガンッ！

再び振動がCICを襲う

『被害報告!』

アルが叫ぶ、この振動だけならあまり損害は・・・

『艦橋下部測距儀被弾!貫通されました!』

顔から血の気が引いた。上部測距儀と射撃指揮所は下部測距儀と繋がっている(リットリオと同じく二段重ねである)危ういところだった

余談ではあるが、電探機器や光学測距がより小型の機器で正確に行えるようになったため、大型の測距儀はどうかという議論がどの海軍部内でもあったのだが、結局の所集光率の関係でも大型のレンズが良いという事で、役割を変えて存在しつづけている。英仏は自国産に加えて第二次世界大戦後に衰えたドイツからツァイスを奪い、発展させ、日伊は日本光学とヴェネチア工房が手を組み、世界最高峰のレンズを競い合っている

『こまけえこたあいいんだよ』

グランチエスカは餓狼のように笑った。敵の命運は極まった。撃てなくなる以外の事象はもはや些事だ。あとは砲弾が結果を弾き出してくれる。それだけだ

『敵一番艦に命中弾!』

『っー!』

待ちに待った報告がもたらされる。命中弾、しかも18inの、ただでは済むまい

デューク・オブ・ヨークCIC

デューク・オブ・ヨークは唐突にもものすごい振動に襲われた

『被害報告！』

紅が叫ぶ。焦げ臭い匂いがCICにまで流れてくる

『右舷前部両用砲消失！弾は両用砲のバーベットに阻まれたようです！』

幸いなことに、両用砲弾庫に飛び込むことは防がれたようだった。

角度次第でなんとかなるものだな、ギリギリだが

『長官！今後命中弾を受け続けますと本艦では！』

耐えきれない、そう参謀長が告げている。修正が行われ、今後敵の命中弾は加速度的に増えてくる。今回は無事に済んだ、でも次はそうでもないかもしれない

『後少し、後少し！』

もつと時間が稼げれば・・・！

『地中海艦隊の汚名など、いつだって返上出来ます！しかしそれは艦あつてのことです！』

『だが！これではインペロの阻止にあたった巡洋艦や駆逐艦戦隊の皆が！』

これでは犬死にはないか！それこそが>不適切<の際たるものだ  
『それは我が艦らが生き残つての話です！』

あちらの艦を戦闘不能に陥れる事に成功したとしよう。この時点で最低でも我々の戦艦は一隻以上が失われるか戦列を離れている。そうなったとき、我々は敵のインペロと巡洋艦以下の艦艇に対応出来るだろうか？・・・無理だ

『祖国を危機にさらすことこそが>不適切<であるはず、いえ、あるべきです！』

門番が門を守らずしてどうするのか・・・！

『報告！アンソン被弾！A砲塔使用不能！』

密集陣形であるためにアンソンは流れ弾を食らったのだ。時間は残されてはいない

『くうつ・・・!』

紅の唇から血が流れる、断腸の思いとはこのことか『・・・艦隊各艦に通達、撤退だ。この場は退く』

もし、これ以上スエズ運河に近づくのであれば、その時こそは・・・!その時こそは・・・!

ムツソリーニ、CIC

『敵艦隊反転!』

『そうかい、退くかい』

この時点で、既にグランチエスカはヒートダウンしていた

『危うい所だったかも知れませんがね』

アルが嘆息してそう続ける

理由は、誰もが艦橋から見れば良くわかっただろう。第二砲塔天蓋に黒い焦げあとが比較的小さく出来ている。最後の最後になって、14inAPSFDSを食らったのだ。250ミリ以上もある装甲をメタルジェットとなって突き破ったそれは、飛沫のように飛び散って人員の大半を死傷させ、なお中砲に穴を空けて全損判定を食らう程のダメージを与えていたのだ

これがもし戦闘初期の砲弾で受けた被害であれば、苦渋の撤退を余儀なくされたのはこちらだったかもしれない。だが、敵はそれを知る前に撤退を始めた

『追撃しますか?』

『いや、深追いは必要ない。レックスがやられちゃったしな』

そして、スエズ運河閉塞のために動員していた旧式豪華客船レックス号が艦隊戦の隙をつかれて潜水艦に沈められた。これでは作戦にならない

『幸い、廃棄予定だったレックス号は無人だったのが不幸中の幸いだがな』

そういつてにやりとグランチェスカは笑う、これじゃあ引き返すしかないよなあ

『各艦に伝達、集まれ、合流の後タラントに帰還するとな』

海面下

『第二艦隊と英地中海艦隊、離脱して行きます』

狭苦しい艦内の中、ソナー員が報告する

『上手く幕を引けたでしょうか？』

イタリア海軍所属潜水艦、ガロファノC、レックスを沈めたのは味方であるはずのこの艦だった。

『決定的な局面を現出させない、そのためには冷静な第三者の目が必要とされる。それが君だ』

グランチェスカからそう彼女は言い渡されたのだ。作戦目的を果たせないようにするには、何をしたらいいのかを

『しかし、良かったのでしょうか？仮にも味方の艦船を』

副長が問う

『死人もなく、会社も解体費用より多くの金を渡した上に、沈められた事で保険金も出るんだから、海軍予算が多少減ったくらいで誰も損なんかしてませんよ』

ま、ムツソリーニがかなり苦戦したようなのは予想外だったけど

『これでいいのですよ』

全面衝突で明確な決着がつくことは避けられた。

『たぶん、あちらも胸を撫で下ろしている連中がいるのじゃないかしら？』

巡洋艦以下は結構やられたみたいだけど、パワーバランス的には戦艦さえ生き残ればどうにでもなるもの

『さ、我々も帰りましょう。副長、針路をタラントへ後は任せます』  
『アイ、マンマ』

ガロファノCは針路を西にとる。しかしこれまでの彼女の行動は機密事項とされ、一般に公開される事はなかった

後に第二次ロードス島沖海戦は、戦果的にみればイタリア勝利、スエズ運河の防衛という戦略的視点からみればイギリス勝利と評される事となる。しかし、A砲塔を失ったアンソンの戦力低下は、B砲塔の一門を失っただけで済んだムツソリーニよりも大きく、南米での政変もあいまって、地中海艦隊からキングジョージ五世級三隻の南アフリカ回航と、東インド艦隊からの獅子王姉妹の引き揚げを誘因することになる。

それは寺津の第三艦隊にとって、圧倒的不利であった状態から戦前並みのパワーバランスへとその天秤を大きく傾ける一大事件であった

21st Lift (第21話) (前書き)

題名書くのめんど(略)

21st Lift (第21話)

2002年2月17日・五島列島沖合い、よいまちづき

長崎ドックでの修理を終えたよいまちづきは波を蹴立てて進む

『改悪とばかり思っていたが、必ずしもそういう訳でもない、か』

永野は艦の動きをCICでトレースして呟いた。アイギスシステムを抜いた事で艦橋が軽くなった分、重心が下がって運動性が向上したのだ。これならば砲弾を掻い潜るのもやりやすくなるだろう・・・掻い潜りたくはないが

『新型の射撃管制システムはどうか？』

艦ごとにこういったレーダー機器には癖がでる。というより、製品にはよりよいものを、と、細部にまで手を加えようとする日本人気質からという物に近いが

『問題ありません、さすがにアイギス程ではありませんし』

『アイギスは捉えたクラッターの処理に癖がそれぞれありますからね』

砲雷長と鷹野一水が答える。いままでアイギスにかかわってきた彼らだ、新鋭とはいえ汎用駆逐艦用のそれよりはシステム運用は楽と感じるようだ

『しかし、戦時にこんなまともな公試がやれるとは思いませんでしたな』

『新大陸連合が対英宣戦したからな』

米国は六隻の戦艦と四隻の空母を持ち、南米は改修が少ないとはいえ戦艦が三隻、唯一英仏寄りのブラジルが落ちるのも時間の問題といわれている

『とはいえ、米国内部はガタガタになってしまっている。どう転ぶか』

東海岸の企業（ほぼ英資本）は軒並みこの戦争に介入反対とデモやストライキを続けている。逮捕などはしていない。彼らは技術者だ、彼らが抜けられたら産業そのものが停止してしまう

『火事場泥棒もいいところなのもただけませんね』

こちらの世論も現米政権には不快感を示している。西海岸の企業（ほぼ日本資本）でもストが出たらどうするつもりなのだろうか？

『ま、おかげさまで戦局は一気に安定したのは確かだがな』

永野はそれで話を切り上げた。彼が所属する予定の戦隊が近づいてきたからだ。第36強襲戦隊、それがよいまちづきが現在所属する新設の戦隊だった

『東シベリア共和国海軍のアドミラル・ミシエルキン他四隻と、大韓帝国海軍のウルサン、サチヨン。そして我が海軍の飛鳥と斑鳩です！』

飛鳥と斑鳩にマーキングされたSCSの記号を見て、永野は唸る。まさか完成させていたとはおもわなんだ

『制海艦構想はコストパフォーマンスに合わないという事で凍結されていたはずですが』

砲雷長が静かに聞いてきた

『試験艦だろつよ』

何故二隻もあるのが疑問だが

『戦隊司令部から連絡です！』

『回せ』

ちなみに戦隊司令部は飛鳥に置かれている。しばらくして回線のつながった受話器を渡される

『よいまちづき艦長の永野です』

『戦隊司令の鬼無里です。少将をしております』

受話器からは比較的わかめの声が響いた

『いま、そちらにこの艦の性能諸元を送りました』  
受話器を手で抑える

『データをモニターに』  
『わかりました』

出てきた諸元と図に絶句した。満載9999トンというのもギリギリきつきつにまとめたという事を示しているが、飛行甲板の前端中央部に五インチ速射砲がデックと乗っかっており、後端右舷にも筐架によってテセオ社のSSMが八発置かれており、艦橋のすぐ後ろにはSAMVLSが埋め込んである・・・な、なんじゃこりゃあ！

『空母と名指しされぬよう砲兵装やらを搭載し、艦載機の運用能力を出来る限り損なわぬよう、しかし条約に抵触しないよう9999トンに抑えた結果がこれだよ』

VSTOLでしか発艦出来ないので機体の搭載能力も限定されるおまけつきでな

『搭載できる宸雷は6機、ヘリなら9機。二隻は無いと戦力単位としても使いづらいという事でこの艦と斑鳩は造られた。結果は見えていたがな』

そして海軍は二隻をひた隠しにした。あまりの駄っ作ぷりに『まるで鵄ですな』

様々な要素が組み合わさった鋼鉄のキメラ

『だが、封じられたままであったはずのこの二隻にも活躍の場が与えられた。貴艦のおかげでな』

マレーシアラインの再度の突破が、この第36強襲戦隊には科せられている。その任に彼女二人は適当であると判断された

『・・・ハルマヘラ島沖海戦よ、もう一度、ですか』

『そうだ』

前回の海戦で戦局を大きく変化させた宸雷の特攻、それと同様の事を期待しているのだ。寺津中将は

『敵本隊は中将旗下の主力が手合せする。貴艦を除いた我々は、海

峽を守備しているだろう脅威の排除が第一の任務だ』

そしてその最大脅威とは、増波されたとされる

『サイクロプス』

『ああ。我々にとつて最大の脅威であるあれは、防空火力の点に於いて先の海戦の戦艦よりずっと劣り、防御も薄い』

飛鳥級が投げ掛けられる航空戦力でもかろうじて意味を為せる。ここで使わねば二度と活躍のチャンスはあるまい

『貴艦は必ずインド洋に送り届けるよ、永野中佐』

『ありがとうございます、鬼無里少将』

それで通信は切れた

・・・信頼できる相手のように思えるが、戦隊の構成が構成だからどこまでやれるか

『公試に引き続き戦隊の連携訓練に移る。艦を斑鳩の後方につけよ』  
いや、本艦もどこまでやれるかどうか

『・・・少し作業甲板に行ってください。砲雷長、任せる』  
本艦が果たすべき役割の一番大事な部分を見ておくべきか

『わかりました。指揮を預かります・・・彼女とイチャイチャしてきてください』

『砲雷長、滅棒な』

・・・一言多いんだよ、まったく！

水中戦闘機とも称される海燕改の作業スペースへと足を向ける・・・  
全ては彼女にかかっているのだった

22th Lift (第二十二話)

よいまちづき、水中指揮所

よいまちづきに行われた最大の改装、ヘリ格納庫内に設けられたこのスペースだ

『艦長だ、入るぞ』

『あ、どうも』

入ると女性士官が少し躊躇ってから頭を下げる。えっと確か6Fから出向してきた

『加納大尉、だったかね。操作の邪魔だとは思ったが、寄らせてもらった。無視しててかまわんから、作業を続けてくれ』

『はい。加納で間違いありません。チェック作業がありますので、そちらに居ます』

水中指揮所のモニターが並んでいる一角に加納大尉は移動する。こっちは格納庫内を見下ろせる窓から、搭載された海燕改を観察する  
『甲標的からの進化系のイメージが強すぎるせいか、幅広に感じるな』

まるでエイのように見える。うん、まるで戦闘機という評価も頷ける。一般的なスラスタ制御より飛行機のような制御を行っている事もあるう

『・・・』

後部座席が開いていて、中で月海が作業をしている。リクライニングを倒した椅子に横たわるような形で両腕を機械に突っ込んでいるが、あれでマニピレーターを操作するのだろう・・・すいません、嘘を吐きました。ウエットスーツを着たような格好で仰向けに身体をさらしてる彼女に見とれておりました

『まったく』

目の毒だ

海燕改コクピット

まさかこの艦に乗ったままこの子を扱うことになるとは思ってなかったわ

『チエックポイント23と49、オールグリーン』

マニピレーターや火器管制を扱うので、リストの多いこと多いこと……ちよつと前まで私を馬鹿扱いしてたあいつにみせてやりたいわ

『ふん……大切な手、か』

ハルマヘラでそう言ってくれた。わ、悪くはなかったわね、誉め言葉としては

『にまにましているとこ悪いけど、上に気を付けなさい』

加納大尉がモニターに出てくる

『に、にまにまなんてしてません！え、上って……』

視線をモニターから外へ

『げ、あいつ！』

いつからそこに！

『そこからじゃあなたのサービスシーンも大概だから、閉めるわよ』

『了解、早くしてください！』

あつのやる〜

『セクハラはともかく、艦長相手にあいつは無いんじゃないかしら、

中尉』

『セクハラの方が問題です!』

ああもう!最悪!

『ゆすつて玉の輿しちやえばいいじゃない。歳もいつてない艦長職、死んでもそこそこ遺族年金他のお金もらえるし、狙い目狙い目』

『ちよ!』

ゆすつてとか、しかも死んでもとか

はいくらなんでも・・・

『別にいつまでも居座る職場でもないでしょ?どうせ40までで行けて大佐止まりだし』

40、それが私達女性士官のタイムリミットと言われている。結婚して子供を産むとして、そのあと育てるべき最低限度の20年・・・それに40越えたおばさんじゃ流石にという話だ

『いや、でもですね大尉』

『キユ?女の子同士で良いんじゃないの?』

間延びした。いや、レーヴァテイルの子はおっとりしているのがデフォルトなので、普通の声なのだが、場にあわない声が割り込んできた

『エーニヤ、あなたたちはややこしくなるから黙ってて』

レーヴァテイルは雌同士で妊娠できる。その場合産まれるのは全て女の子でレーヴァテイル。人間との場合は男の子は人間、女の子はレーヴァテイルとなる。女の子同士で増やせる彼女達とは一緒にしてもらったらすすがに困るわ

『えー?つまんなーい!』

エーニヤは眉を寄せて抗議する。彼女は海燕改の操縦手、私の相棒である。音を見る事の出来る彼女達は海燕の存在に無くてはならないものだ

『大尉、ちよつといいかな?』

コンソールの向こう側からあいつの声と、席を譲る大尉の声

『大村中尉、聞こえるか』  
『作業中ですが、何の用ですか？永野中佐』

この覗き魔と突っ掛かろうとも思ったけど、黙っとく

『今回の演習はあれだ。あの日話した想定の予行練習だ』

『こ、ここでその話は！』

不味過ぎるでしょ馬鹿！

『・・・変に反応を大きくするな、俺が前に話した奴だ。その日に  
な』

あー、えーつと、その・・・つまり、はい。やっちゃいましたよ、  
ええええ！ノクターン行きですよーだ！

『・・・聞いているか？』

『わかつてるわよ、インド洋でのSSTO回収ミッションでしょ！  
？』

だ、だからといってまだ何も始まってや居ないわよ！当然！

『・・・僚艦が防御スクリーンを張ってくれるが、それに対して突  
破をかけてくる敵をどう凌ぐかが今回の肝だ』

送られてきた今回の演習海域、うそ・・・

『本来の演習海域より北側過ぎませんか？これじゃ』

『ああ、長崎・五島航路上だ。戦時という事もあって、数日間の運  
休をしてもらったそうだ』

民間航路・・・いや、それよりも

『わかるか？』

永野が聞いてきた、わからない筈が無い

『私が長崎県人と知ってて聞いてます？』

長崎県が一番の特徴だ、リアス式の深い湾を持つ複雑な海岸線、長  
さで言えば北海道に次ぐというだけでどれだけ異常かがわかるとい  
うもの

『水上艦でも良いかもしれないけど、それは制海艦があるから先に  
見つかってしまうかもしれないし、考慮から外すとして・・・』

『潜水艦』

永野が月海の言葉を嬉しそうに引き継いだ。

第3艦隊以外からの奇襲がありえるかもしれないわけだ

『それを潰せ、と』

『ご明察・・・それに、私は6Fの手並みを見せてもらったことが無い。楽しみにしている。君の手並みもな・・・すまん大尉、邪魔をした』

席を離れる音

『・・・案外キレルんじゃないの？あの人』

出ていったのか、大尉が引き継ぐ

『地形見てたら思いつくでしょ、それぐらい。本当にキレル人間だったら潜伏している湾まで予測して言うわよ』

なぜかエーニヤと大尉が大きくため息をついた

『案外月海ちゃんは理想が高いもんねえ』

『大体年齢も若い中佐クラスの何が不満なのかと、小一時間』

『またそこに戻るわけ！？』

脱力する。もういいじゃない、その話題は

《これより海燕の離艦を行う、要員は・・・》

永野の声が、今度は艦内放送ごしに聞こえてくる

『少尉、チェックは』

大尉が声音を変えて聞いてくる

『済んでいます。システムオールグリーン』

『音響機器』

『オールグリーン、スタンバイ』

二人が答える、あらあら、それじゃもう私の仕事しかないわね

『こちら水中指揮室、海燕のスタンバイ、オールグリーン。離艦用台車に乗せませす。後方甲板スloopまでのクリアーはどうか？』

《オールグリーン。要員は退避済み、格納庫扉開く、離艦開始！

離艦開始！》

ゴウン

シャッターが開かれる。SSMを撤去して作られた海面に繋がるスループの常軌、これで台車に海燕を乗せて滑らせ、海中に投入するのだ。一応考慮された原案では、艦尾に嵌め込み型で搭載することも考えられたのだが、整備を考えたらやはり、ヘリ格納庫を代替するようにしたほうが良いという事でこうなった。大戦時の利根から大淀へと水偵の搭載方法が変わっていった事も無縁ではないだろう

『ロック解除、対衝撃体勢。さあ、いつてらっしやい二人とも』

『了解！対衝撃体勢備え、ダイヴ、ダイヴ！』

台車が滑り、艦尾まで一気に海燕を滑らせると、ガコンと斜めに傾いて海燕に海中へと投入する

《エンジンスタート》

すぐに動く艦後尾のスクリューに巻き込まれかねないので、着水してからエンジンは起動するようにしている

《水中指揮所より海燕、これより状況開始。状況紫》

《了解、これより状況紫を開始します》

紫、索敵しながらの敵脅威排除ね

《艦からのアクティブピン、一回願います》

《少し待て・・・許可が下りた》

カァンッ！

甲高いピンの音が外板を叩く

『エーニヤ』

『うん、見えたよ。でも、見えてる範囲には居ないみたい』

やっぱりというか、どこかの湾内に潜んでるわね？探り出して潰す。

いいわ

ひねり潰してあげる

23th Lift (第二十三話)

よいまちづき、CIC

『・・・』

永野はモニター越しに第36強襲戦隊を率いる百目鬼少将の戦術運動を眺めている。モニターはよいまちづきを中心に、周回運動をする二つのグループ、百目鬼少将の制海艦2隻と朝鮮海軍の2隻からなるグループと、東シベリア共和国海軍の4隻のアイギス艦からなるグループだ

『うん、これがベターかな』

『でしようねえ』

砲雷長と頷き合う。この強襲戦隊だけでは艦が足りないので、護衛対象をがちり固めるような輪形陣は適当ではない。かの陣形は確かに有効なのだが、自艦の担当空域でない艦の火力を投射できる時間がどうしても短くなるし、隻数が少ないと穴が広くなりすぎる。翻って現在の周回運動を行う形だが、接敵時にすぐこの艦の元へ来ることが出来る・・・接敵に手違いがあると、薄いどころか無になりかねない危うさはなきにしもあらずだが、これしか思い浮かばなかった

『しかしキツいな。マラツカ海峡突破時に、制海艦の搭載機は半数減の6機のみとは』

ずっと同じ機を使っているわけにはいかないのです、2機のペアで三交替制の上空警戒をさせるしかない

『クラ地峡越えで補充が出来そうな気もしますがね』

砲雷長が言う。本来の空母航空隊の場合、実際は二組のパイロットを確保してある。だから、一組目が全滅しても代えは存在している。

だが、彼女達にはそんなものは用意されていなかった。むしろ航空隊が有っただけ驚きだ

『3Fには宸雷の航空隊は無いからな。4Fからこれ以上借りるわけにもいくまい』

あれは元々、着上陸支援の為の機だ。俺達が持つてても意味が無い。全部統一して運用すりゃ良いのだから、艦隊それぞれの規模が大きすぎるわな

『さて、この地点で考えられる攻撃方法をどう防ぐか、だな』

長崎・五島間の海上・・・

『ミサイルアラート！！大村湾！ならびに長崎湾、久賀湾方面より飛昇体を確認！』

考えにふけていたところで、鷹野一水が見つめていたモニターから振り返って報告する。やはり湾内に居たか！湾からの報告ということは山の稜線を越えた時点で捕捉されたに違いない

『対空戦闘！オールウェポンズフリー！対空警戒を厳となせ！』  
捕捉されたのは各方面20発程度

『多いな・・・』

6Fの潜水艦発射型のミサイルではない？流石に湾内に複数艦の潜水艦は投入出来まい。出口を塞がれたら終わりだ・・・水上艦は備砲とかがまだあるから別だが

『戦隊集合します！』

フリップボードには、太極旗のような航跡を描いて中心の本艦に寄ってくる僚艦が映し出されている。特にアドミラル・ミシエルキンはアイギス艦らしく、既に迎撃ミサイルを放っている。本来ならこのよいまちづきも参加しているところなのだが、対応外だ

『な、内陸部からも飛昇体！ミサイルアラート！』

『内陸部！？まさか、陸軍の！？』

確か陸軍の対艦ミサイル搭載車両は、一輛で六発を搭載している・・・間違い無い、フリップが示すミサイルの束は6発単位だ、間違い無い。寺津中将が手を回したんだ。どれだけコネあんだよあの人は

『とはいえ、数から言えば対応出来ない数じゃないですね』  
『あたりまえだ。対応出来ない数で飽和されたら訓練にならん』  
そうならないよう、我々は対空警戒を厳にし、防空陣形を整えたのだ。あとはどこかでミスを誘発しないかぎり、潜り抜ける試練である・・・ミスを誘発する事象をどれだけ訓練の相手側に用意できるかが訓練の主催者側には求められる。寺津中将はそのあたりも上手いので、智将とも呼ばれるのだ  
『だが、そんなことはあの人のことだ、事前に看破してるだろう。ならば問題は次だ』  
いったい何を仕掛けたんだ・・・！

### 海燕改・コクピット

『さあて、どう侵入する？エーニヤ』  
『うーん。怪しいところ潰していくしかないんじゃないかな？こんなかんじ？』  
エーニヤがルートを表示する。椋島南方から北上するルートだ  
『このルートだと、取りこぼしはなさそうね、確かに』  
悪くない、ただ・・・  
『時間と電池が問題ね』  
よいまちづきに仕掛けてくる時間帯までに発見できない可能性がある。それに、時間がかかればかかるほど、高機動はできなくなる  
『・・・ねえエーニヤ、針路は真つすぐでお願いできるかしら？』  
『無謀じゃないの？』  
下手な位置に出たら、これ幸いと撃沈判定を貰ってしまうだろう  
『敵の位置がわかりしだい全力で逃げるわ。位置がわかりさえすれ

ば、攻撃は私たちじゃなくても出来るし』

まあ考えとしては、上で飛んでる宸風と同じような事をすれば良いのよ

『・・・もしかして艦長さんのお手柄にしたいの〜?』

『なっ!そ、そそそそ、そんな訳ないでしょ!』

何を言うのエーニヤは!

『えー?今なら誰にも聞かれてないよ?なんで手柄を急ぐの〜?』

うっかりよいまちづきが撃沈判定貰っちゃっても、回収されての整備が出来ないだけで、ひっぱって持って行って貰うのは可能でしょ?

『べ、別に!』

『あはは、もしホントにそうでも慌てすぎ〜』

・・・エーニヤ!からわかわないでよ!もう!

『じゃ、リクエストどおり真っすぐいくね〜』

エーニヤがスラスターの推力をあげる。うううっ!逆になんか納得いかないいつ!

???

『定刻だな。全魚雷発射管撃ち方はじめ、状況を開始する』

23th Lift (第二十三話) (後書き)

感想・ご意見をお待ちしております

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8370h/>

---

駆け抜ける嵐に、静かな海を

2010年10月13日16時18分発行